

4862

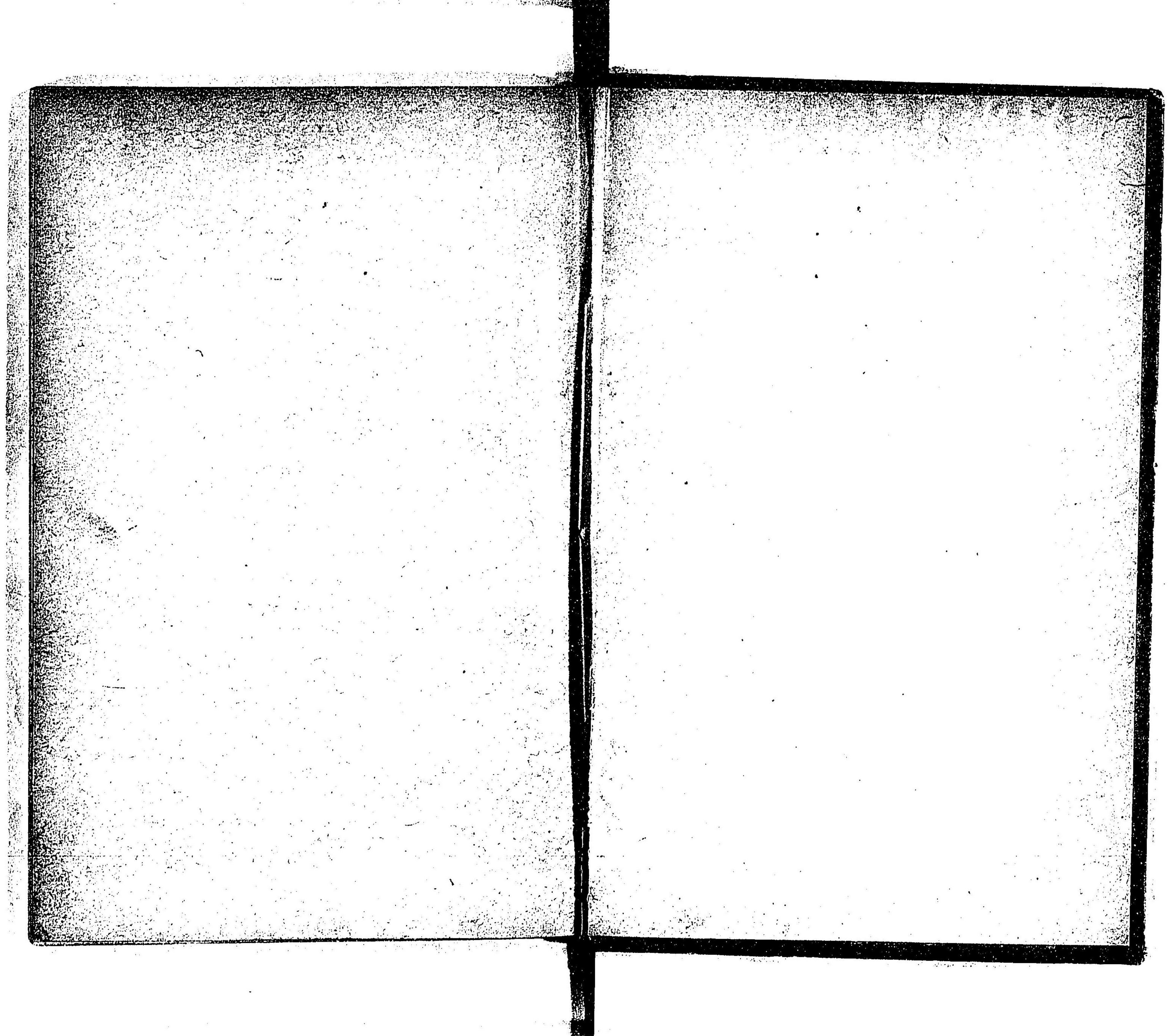
拍手喝采

滑稽天狗演說

天愚人道戲著



第 4



天愚道人戲著

滑稽
續天狗演說

東京

翰香堂藏



目 録

- 第一回 大天狗再演説の趣意を述ぶ
- 第二回 自由と我儘の區域を明らかにせよ
- 第三回 浮氣商賣とサラリと止めた
- 第四回 保安條例を讀んで感あり
- 第五回 敵なきものゝ倒れ易す
- 第六回 自負紳士の頂門へ一本参るべし
- 第七回 奴隸社會の主權者ハ人類の外に在り
- 第八回 人間万事意氣地の説
- 第九回 戯れに猫の尻を戒む
- 第十回 油斷大敵は何れの時代にも記臆せよ
- 第十一回 嘘も突くべし嘘を嘘にすべからざ
- 第十二回 色は好むべきも虚飾天地と爲すなかれ
- 第十三回 退去者諸君よ忠告す

第十四回 會社の流行に連れて瞞着會社は起らぬ乎

第十五回 道理が絲瓜乎絲瓜が道理乎

第十六回 好色の虎の巻を論ず

第十七回 大照魔鏡を照らして現今の百怪群行を看よ

第十八回 尻子帯に代て書生社會に一言す

第十九回 仇文句を戒めて女風の矯正を試む

第二十回 女郎買ひの辣味憎とい何ぞ

滑稽 天狗演説續篇

天愚道人 戯著

○大天狗再演説の趣意を述べ

又手拙者は御覽の通り怪面然たる面相にて錢の年中不思議にもあつた例がなくピーク風車で毎度驛屋の御厄介となりまして僅か五厘う三厘の熨巻で壽命と繋ぎ居ると云ふ芋虫にも劣つた極々値打のない人間ではあります毎度嘶家の前坐の申を通り好きこそ物の上手なれにて御饒舌をいたすのが拙者の病にて自分としても甚た不思議に存する所あり依て試みふ反古の中から家の系圖を引摺り出し余は如何あるもの、子孫を調査と遂げましたに勿躰なくも大食冠蝦蟇足公三千三百三十三世の後胤蚤の宿禰の三男邪賣太郎左衛門の一子尻玉苦齋の末孫ふして決して嘶家の子孫ふこれあく天晴れ名門の家に生れ々々、饒舌るが病いとば實に恥入つた次第ではあ

二
まますが是れも病いなれば致方なく既ち毛唐國の醫學大博士三角杏庵先生
の診斷を受けて見ると全肺拙者の腮には締りがなく兎角上腮と下腮が打付
き易きより自然饒舌りたくなる道理あるを以て此病いの桂枝葛根湯位にて
はなるく瘥りそうもなれ誥り地獄に往つてから閻魔大王に舌を扱られる
まては平癒すまじとの診斷なり拙者も此診斷を聞へて甚だ當惑いたしたり何
とあれば饒舌病の診斷を乞ふて必ず地獄に墮ちて扱舌の嚴刑に處さるゝこ
とを以て預言されて見ると如何に値打のない肺でも心持ちの好い譯けでもな
いのでありませぬ拙者の申す言は嘘で堅めて法螺でこねたやうに聴き
取りの方もあるのは知れませぬ是れでも案外正直でありまして嘘と申し
たら女郎買ふ徒て娼妓に惚れて貰いたいと思ふ時にお饒舌りをいたすにさ
へ爪羹程も嘘を云ふことはありませぬ然らば娼妓が惚れるかと想ひばそう
旨くはいきませぬが何様嘘と突かない正直の男の舌と扱くとは如何に閻魔
大王でも壓制殘酷極るではありませぬか早晚此娑婆を遊りまして早速大

醫院へ上書したす決心でのあります上告期限が五十年や百年はあ
るものでありますから此儀は第二段として早速お饒舌りに取り掛りませうが又
手お断は何か一評子變つたものが現はれませぬとお断にならませぬドッ
と終ちやら断家の前坐めいだ口氣になつて来たぞそんな安ッポイ男ではな
かつたに以上の事をお聴き流しを願つて是れより眞似目な議論に取掛りま
せうイヘン
前篇にも申述べた通り拙者の面は全く怪面然たり此儀の拙者も毎朝水鏡
を審査いたし居るに依て斯く申す拙者が自から保証するを以て決して疑ひ
はありませぬ實にお八百倍の顯微鏡にて鏡かに頬と頬の間にホンヤッ鼻の形
を認めると云ふ貨物あれば怪面に相違ありませんが此怪面が秋葉の三尺坊
糞と陥へ鞍馬の大僧正屈でもあけと云ふ程滅法外に鼻の高くなること
が有ると申すの實は不可思議妙奇徹列ではありませぬ尤も近來社會も天狗の
殖へたること夥しく天狗共進會でも開かずばなるまいのと申す程よて政事

家であれ工業家であれ學者であれ商人であれ若しくは山師家であれ法螺吹
きであれ馬の骨あら瑤輿たまごしに乗つた貴夫人であれ、マンマと旦那の鼻毛と敷み
盡つくくした權妻君であれ又は私生の餓鬼を生みおとして恥ぢとも思ひぬ不貞
腐れの後家とのであれ、度々箱馬軍で第二局へお坐敷と掛けられで往つても
屁とも思ひぬ娼法主義の少し顔がノンベリとして生白ましろい賣れの好いドラ寮
兒こであれ皆な天狗若くは天狗の親族あらざるのさく甚しきは鉄の鎖くわも繋つり
れて八大地獄で土擔つちかたとして居る赤衣坊あかひんぼうでも娑婆しあばに居る時の随分幅がさいた
ものだと天狗を氣取る世の中なれば我々の怪面が時ありて五六尺も鼻の高
くなる事があるのも左まで怪むに足らずてはありますが内所では御鞆ごたづの塵
掃除もし人の尻も拭ぬぐひてやつても少し小錢が廻るやうおなり世間の通りも
好くあると鼻が段々と伸び出して俵藤太の射いとめたる大蜈蚣程おびかの鼻となり
蟻あ々あ々として自分でも鼻の始末に困るやうお事もあらうと想ふ大天狗に
爲るのは左まで難むづかしくてもあるまゝと存ぞんじます去れば拙者の鼻が僅わずかの五

六尺に伸びたからと云つて不思議でもなんでもなく天狗のお仲間入りも出
来ない位いなものでありますが饒舌じょうぜつるのは拙者の病びょうんで遂ついひ前篇ぜんぺんに於て
極々内所で饒舌つて見た首くびを折おりし煩わづ薯いもの錢ぜにに困つて一山百文に賣出して見
るとソコが商賣身寄りしょうばいみ寄りと申すべさる將た諸君の想ふ壺つぼにはまつたと申すべ
さる無慮五六十萬部も賣り盡つくくし爲めに東京の紙屋かみやに大きな庫くらと押立てた
ものお七八百軒もあると云ふ結果を現はし拙者もお蔭かげで八百善の料理とま
てはいきませんがいふりて繩しづ籠かご液えき溜ためつて芋いもの煮しめに白馬を一盃傾け圓
遊主義ゆす主義のステ、コを踊り出しそなた勢せいいになつて見ると鼻がソソく伸び
び出し禍わざいも三年立てば役やくお立つと云ふ謠うたもありますが此御饒舌も錢ぜにおな
るやうおなつたのは有り難い此勢いお乗じて饒舌り立てなば佛ぶつのガンベツ
ス氏うぢも糞くそもあるものゝ蘇秦張儀も何のその我こそ全世界古今獨歩唯たの一
人と云ふ大雄辨家となり富士山を小腋こわきに抱いて近江の湖水いづみ液えき一股ひとまたに超こひ歐
羅巴えらばを丸呑みにして南北亞米利加を手珠たまじお取り亞細亞全洲と一ツの放屁はつぺで

吹き飛ばすと云ふ程の大法螺も吹いて看たいと忽ちにして大天狗となりまして霧晴滅法に鼻ばり高くしては看ましたか退へて吾身を顧れば矢張り依然たる貧乏書生で差當り鼻の置け場所も困り遠くに裏店の隅でも借りて入れて置かうかと存じましても差配人への附け届けにも困る仕儀であつて看れば裏店と借りることも出来ず好しや借を得べしとした處が此鼻を七巻きも八巻きも噴水器の「ゴム管」のやうなグムく巻きにしても九尺二間の裏店へは逆も遣入り切れずさうのと云つて大道へ、ノケハリ出して置くときは忽往來安を妨害して警察官に叱られると當然なり好し其時は此鼻は全く抽者の面に附屬し居る大切の鼻なり假令厄介物たるも今更大根切りに切り捨てる譯けぬも行はず亦猶牛の小便八丁垂れ流かしをやらぬをも連式罪に問ふこと罷はさると一般實に已むと得ざる次第なりと一應の抗辨もして看やうが全株大天狗を氣取るのが宜くない今の民間に在る青書生どもが大政事家を氣取て忽ち我こそ内閣に立つべき人物なり斯く野に在て芋を掘ちくの

たり下宿屋の充行ひ飯を喰つたりして居ると云ふも畢竟の政府も目の附て居るものなれ故である我々今の政治が氣あ入りぬなど、甚た不條理千萬なる不平と鳴らして遂には暴れ出しぬぬ有様なやと云ふも亦其方の鼻の滅法伸び過ぎて始末に困るのみならず遂には社會の妨害をなすと一般より其方の鼻の主義こそ違ひ矢張り前の書生等の類いであるなど、叱られた上に忽ち保安條例の變則で三年間も退去でも命じられた日おは、それこそ鼻の始末も困る一件でありますから拙者も殆んど當惑を極めましたか俗も三人集れば文珠の智慧と申すこともあり是れは一番大きな奴も相談するに如らずと考ひ差向き奈良の大佛も協議と遂げて看ると流石に大佛は大佛だけありて忽ち拙者に一策を興へられました又手其策は他にあらず一生懸命上臈と下臈の續く限り根限り精一配に法螺を吹き立て、看よ或は法螺を吹き當て、錢の儲める事なしとも云ひず幸はあして錢を儲けなば槍持ちの雲龍の五六百も續けたやうな馬鹿に長々しい蒸氣船を製造し其船に鼻を載せ

去て歐羅巴に渡り鼻を觀物ふ出すべし足下の鼻を觀たらんには如何に鼻の高みのが自慢なる白哲人も必ず驚ひて我もく〜と云ひはやし必ず錢が儲るべし去りなからそれは差向し當てにもあらん云ひ大金を拾ひんと想つたばありで前喜びとするやうなものなり依て先づ法螺を吹き立て、看よ若しやりそこねたときは迷惑ならも當分此大佛殿の廡を貸すべきも依て此下にその厄介な天狗鼻とのたばらせ置くべし其儀は承諾いたしたとの御托宣でありました拙者も是れで法螺を吹た損しても鼻の始末の大佛公に頼むことあいたし親船に乗つた氣になつて此續篇の演壇でプ〜プ〜と梯子屈的くつてきな法螺を吹き立てませ〜とありましたも依り聽衆諸君も道人の鼻は成程始末に困るだらう可愛想たと憐憫を垂れ少々の吹き損じは大耳に聞き流して偏へに陽采と賜ふべし是れ即ち道人の再び法螺を吹き出し趣意でありませすナヨ〜

○自由と我儘の區域を明りよせよ

諸君よ諸君はその窮屈なること手には手錠とはめられ足には足枷をはめられ口は猿轡をはめられお負けお鳥籠のやうなものに入れられ行くは行かぬは出るには出られず饒舌には饒舌られず唯た生きて居ると云ふばかりなる不自由を欲し給ふか將た手は心の命する限りは勝手に働き足も自由に行くべき處も行き家屋も金さへあつたら元と穢多でも屑拾ひでも乞見でも泥坊チット何んでも蚊でも今は紳士然たる位地を占めて五六層もある籠棒に大きな石の家で小建築して硝子を倒さに釣るしたやうな別嬪さんを細君にして旨いものは喰ひ飽き好い衣物の衣飽き演劇も觀飽きて熱海へ湯治にでも出掛けやうのと云ふ自由な躰になるを欲するのと問は、諸君は餘計な法螺を吹くな今の自由貴重の世の中は誰が窮屈を欲するものがあるそんな事は問はずともまた胎内に居る赤ん坊でも百も承知二百も合點なりと此道人も亦た左様に存すれども壓制極る封建時代と今日の自由世界とを比較しなば諸君の果して如何なる感覺がありませうの試みに舊封建時代の事

を懐ひば同じく人間の皮を被つて飯も喰ひば酒も飲み糞も垂れれば屁も放
る大名と云ふものが威張つたにもく丸るで人種が違ふ處の我々平々たる
平民は蛆虫むし同然に看られて少しく商賈の手を廣げて看たいと思ふとコリコリ
その手を伸ばしては相成らんと叱り少しく見ない處でも見たいと足を踏み
出すや否な又もコリコリを喰ひ少し大きな家ども建てるも又もコリコリ少し氣
ふ喉のぬ事があつて如何にお上の仰せでも餘りとして御無理だと云ふま
り早く大きなコリコリと喰つて常あへいこ踏み潰つぶされた平脚へいかくのやうま
なつて居つた時を懐ひば今の時世は如何でありませうかお月様と籠かごどころか
丸るで天地を一變し鹹苦茶かんくちやでイヤいな臭においいがする上に年中小言ばかり云つ
て居る糞婆くそばに抱られて居つた者が何つの間にやら閉花羞月沈魚落雁色ハハ
ツキリと白く鼻はツメとして高く頬ハツツクリタとして軟やわるに目はハツナ
リとして黒くろみのちよ唇はヒメとして薄くも厚くもなくして昔の綻はなびた
やうな梅うめに看へ髪はトコトコとして漆うるしよりも黒い上は濃く眉は細長い柳

の葉を附けたやうな風で顔には一點の穢けがもない上に膚は雪より白くしてフ
ムハリとして軟かな顔るく、モ一ツ顔ると云ひたい程な別嬪に抱られ居つ
た程の相違があるかと思はれます我々とても智慧もなければ錢もないにもせ
よ人の皮を被つて居る以上のお粗末ながらも人間に相違なく同じく此世お
生れ來た上からは人間天賦の自由を得たいと申すのは尤至極の事にして云
はゞ野郎も二十五六の三十にもあればどうぞ好い鼻はなが欲しい阿魔あまも年頃お
なれば好い亭主が持ちたい一生後家で暮らすのいやだと云ふも同然おし
て斯ごとなる情慾あればこそ人間の情ありと云ふべし去れば諸君が自由を望み
給ふのサラ／＼御無理とは存ぞんません又自由を得たい／＼と氣を揉んで販
け廻まわるのも決して入らざる野路馬やろまとは思ひません何となれば自由の宛あても
別嬪さんの如く此方こなたより惚れさせる工夫をせんとコンリンザイ向ふから惚
れて來ることのないは諸君も御經驗の上にて百も御承知なるべしと信ずれ
ばなり又自由と金錢にも喰ふべし噫あ金が欲しい金が欲しい金のあつたあ

愉快も盡くさるゝぶらうアノ新橋飛切りと云ふ藝者にも伝と云はせる事が出来るだらう五六萬圓の地所も買つて置たいもんだ鉄道株も二三十萬は欲しいもんだ意氣で立派で奇麗な家も建てたいもんだ二三人の權妻も置て旨い酒も飲んで看たいもんだ噫、金が欲しい誰の百萬圓も持て来て呉れるものいあらう庭の隅から金の棒の五六百本も出るあらうと金が欲しいと云ふ欲念は十二分もあつても働くのが大嫌ひで唯た年中棚の唐茹のやうにアア／＼して居つた時に借金と塵の溜るべきも決して金の出来る筈なし自由とても亦同一の道理がありまして自由は元來天より授けられたものである自由と權利の我々の罪九の如く必ず二ツは附て居るものである何も噪き廻らすとも自由は誰でも持て居ると云ひは云ふやうなものゝさうばかりも行きません近く例を舉げて申しませうなら我邦の自由論が始めて天窓と持ち揚げましたのは征韓論のお尻が民撰議院となつた時でありませう當時の民間の議論なか／＼喧ましく夫れこそ法條でも何んでもない人民の心の眞底うち

湧き出した大議論で少々は糞焼けるもあつたにせよ宛らと惚れ合つた阿彌才三が私しや、どうあつても夫婦にしてくれまいと死んで仕舞ひますと駄々でない本當に云ひ張るやうなもので兩親も飛んでもない事してくれられた此腹帯は何事ぞと叱つて見ても後の祭り出来た事あれば仕方がない夫婦にして見ると結局他所の氣の知れない婿と貰つたよりも二人りは本望遂げて夫婦になつたの嬉しさに一生懸命に働き出して身代も追々好くなつて来たど云ふやうな有様にて民撰議院論の起つた時は反對黨の人々よは氣障な野郎だ悔やしまぎれお餘計な言を云ひ出しやがつて散々我々を氣を揉ませた上お今までグ／＼眠つて居つた人民迄がヒョ／＼天窓と持揚げ出して同じやうお小理窟もと云ひたて始末に追ひるゝ事になつて来た、さうかど云つて不都合な故に叩き潰した舊封建の壓制を撥ぎ出してビ／＼押し附る譯けにも行くまい、モ、斯くあつて来ては仕方がない大概な理窟の大局に見て云はせて見ろと云ふやうになつて來ると人民の理窟もあか／＼尤に聞

へるやうになり人民は理窟を云はれて見ると成程不都合な事もあり又不行
届な事もあり是れでいならん扱あり居つた愛にお氣が附られまして小面
倒を法律などもソロソロ調べて見ねいならず彼の條例も不都合ぢや改正し
ろ此規則も不完全ぢや修正しろと云ひ、貧乏た子に教ひられて淺瀬と渉る
と云ふ鹽梅よて遂に法律の完全を致すやうあり又赤髮奴輩の利口をうな
言と云つて居るが全躰せん生活として居るの觀るは放棄ぢや一番斬しの
種に往つて觀てやらうと十二分も野蠻人と侮る心と持て往つて觀ると想つ
たよりは相違ともく、觀る物毎に是れはどけあり權を潰ふさゝるはなく政
治と云ひ技藝と云ひ又その生活の高尙よして立派と云ひ一としてその脚元も
及ぶべきあらず噫、我ながら誤つた多し、斯くまで開化して居らうとは
想ひなかつた是れでは我々もウカウカして居られんウカウカして居ると
國も取られんと限つた事もないとサア遠くに氣と揉み出したこと夥しい丸
巻で書の家を打ち毀して新規建替ひと云ふ有様になつて看ると何事も赤

舞の真似をしたくなり彼れも洋風是れも洋風と宛りも一度買つた女郎が案
外な美人であつて夫れが病み着たとき今ではセツと通つて足駄を穿
いて首つたけど云ふ程惚れ込んだも同然とあり何事も西洋ならねば夜も日
も明けないと云ふことになり遠くに學校を押立るやら書生を留學に出して
やらやら法律を組立るやら開墾と始めるやら工場を起すやら電線を引張る
やら鉄道と築くやら漁船を輸入するやらその噪きと云つたら圓遊がステ、エ
を踊る側に万福がヘッ、をやらうす途端に圓太郎が喇叭を吹き立て、
嬰さんあふないと嘯鳴るよりも甚たしは是れを實に我天地一變の時であり
ました

又手右の如く天地と一變させたもの誰であるかと云ひば第一お役人様の
お骨折お相違ありません元はと云ひば我々人民が理窟を云つた結果であり
ませう如何にお役人様の沙汰にて他にお智慧と附て貰ふすとも御自分で
何事もサツと運びなされるでもありませうが若し人民が白川夜舟でク

ぐく寐て居つた日には斯くまで速うに進歩は致さんであらうと存じます
 果して然りともせばそれ多覽なさい民権院論が起つて人民の昏睡を叩き
 起こしたればこそ斯く進歩した譯けにて今では眞に國會を押立ることゝな
 りその年限さへ最早僅に二年となり且つ法律と云ひ學藝と云ひ驚く程又進
 歩し工業もツツく進歩して東京のら仙台まで一日間お往來の出來ると云
 ふ世の中よなつて看ると曩きお業思まゝしいと思つた人民の理窟もマッ
 ザラ妨害をなした譯けでもならうと信じまを我々の自由の爲めお氣を揉
 むも矢張り同様にて或る人は喧ましいとも奮闘いとも申すでありませう
 が我々も正理の所す限りは自由の引き伸ばし方に骨を折らねばなりません
 事業におれ言論におれ何事も自由を欲するは取りも直さず社會の文明と進
 むる基いであつて看ればマア大概な事は我慢をしるべかり云つて居られ
 ません左は去りなると自由と我儘とは似て非あること喻ひバ猫の虎に於け
 る比丘尼の男僧に於ける冬瓜の番瓜に於ける牛の糞の味噌に於ける河虎の

屈の空氣鉄砲に於ける權妻の正妻に於ける歌妓の娼妓に於ける籠棒の笑秤
 棒に於ける如く大いなる相違ありと云ふべし就ては文明の進歩するに隨て
 も自由と我儘との區域はハッキリと立て置きたさのものなり若しも此區域
 におぼやかりして居るときは貴重の自由との知らず識らず我儘なる悪逆し
 て飛んでもない害をなすに至るべしと心配いたすなり依て此區域に就て聊
 ちあれ饒舌りといいたすのは無用の辨ではあるまゝと信じます
 抑も自由と我儘との如何なる懸隔があるかと申せば一寸とした事おも自
 身ら區域が立て居ります喻ひば愛に放蕩子息あらんか我々は一個自由の人
 民なり如何なる事としやうとも自分の勝手なりとて親の意見は唯だ左の
 耳より右の耳へ通り抜けをさせるのみにて女郎も買ひば藝者も買ひ人の勤
 め時にノラケラ然として遊び行きお貸けに酒はあびる程飲んで揚句のはては
 はマッラヌ言を云つて狂ひ廻り少しく忠告でもすると自分の錢を出して
 自分の口へ酒と飲ませ自分の躰で狂ひ廻るお何の憚る所あるべき是れ

余が自由あり權利なり女郎も藝者も賣ると云ふ自由あれば我には買ふと云ふ自由あり世間では人の鼻の事まで入らざる世話と焼くものあれと自分の鼻なれば氣に入らぬときへ遠慮なく叩き出して馬の骨でも牛の角でもなんでも構はん自分の氣に入つた女を引摺り込んで愉快とするのが自分の自由ぢやなすと云ふに至ては諸君は如何に思ひ給ふや是等は折紙附の正銘偽りなき我儘の骨頂でありませう又鼻も鼻なり出すなら出して見ろ懼りながら今日の女權流行の時であるぞ如何に女房だのらと云つてへん／＼亭主の言ばかり聽いて居られん朝寐とするのは元來妾の自由權内に在る何となれば人の鼻を借りて来て無理に寐らし置くにあらざればなり又針仕事が嫌ひだの掃除とするのを厭やゝあるのと朝のら晩まで小言と焼き通ふしに焼き立るが妾の鼻は妾の自由なり實に入らざるお世話と云ふべし仮令ひ襪を施ひて居らうとも錦を衣て居らうとも妾の勝手なり又妾が少し遊びてもすると眞噓のましくブツ／＼云ふが現在亭主たるお前さんも女郎や藝者と買ふて樂む

ではありませんのお前さんに其自由かわらば妾にも其自由ありと遂に彼夫と遊びるも自由と云ふに至りのねぬ有様は是れ亦自由と誤解したる我儘と云ふべし又彼の自稱紳士とか錢取る面どの云ふ随分横着な心を持つて居る人間を看よ此等の人間は手の届く所足の届く所錢の儲かるだけは儲けやうと熊鷹のやうな大きな眼玉をむき出して啄り行くのは亦姑く恕すべさも無形の電線を處々方々へ架け渡し置き他の人民の一生の智慧を絞り出してエシヤラヤツと一ツは事業を目論見むと此熊鷹めが直くと爪を出して掻き搦み何んでも蚊でも錢の儲けりううな事と見ると己れが／＼と出まや張つて構ひ氣になるのは如何に金儲けは自由にせよ是れ等も我儘の弊害と云はざるを得ずでありませう去りなら右等の我儘は悪るいには相違ないが云はよ一身一家の事もへ叩くに及ばずとするも政治世界に向て自由と我儘と取違ひるのは大いなる害があります何となれば僅々の者が心得違ひより社會一般の迷惑となる事を往々引き出すことがありますよ依て、あります嘘ひ

は言論の自由は人間自由中の最も貴重なる自由と云つて亂暴極る過激
 論を吐き散らし苟くも我に反對するものは氣に入らんと云つて天窓のら業
 のやうな罵り立て又は全軀役人の爲る事が一々氣に入らん今の役人は殘
 吏逐ひ出して我々が内閣でも何んでも組織するの權利を持つて居る若し之
 へ援するものあらは理でも非でも構ふもの腕力をやつつけろなどと、電
 すのも我儘の最も害あるものでありませう如何に言論は自由があるとして勝
 手に暴論を吐き散らしても苦くないと云ふ道理はなく如何に政治が無に
 氣をとて腕力を撒き出して妨げをいふと云ふ理窟がいつて溜るべきや此等は
 理窟にも自らの區域があるにも委細構はす我思ふ通りによらぬしるも業
 とないし心得違ひをして居るに相違ありません還に保安條例とのあるも
 言を得ず出抜けてくるやうな事ばかり真誠の自由を伸べんとする異似目
 人の迷惑となり飛んだお相手を喰はせるやうな事もあるお依て自由は我儘
 々の區域はありと云ふハツキリ立て、置きたいと思ふ諸君は如何に

浮氣商賣はサマリと止めたし

○浮氣商賣はサマリと止めたし

世に浮氣商賣とて一種奇妙なる商賣を營むものがありまをが夫れは何で
 おと云ふと聽衆諸君は異口同音にお答ひがさるでありませう第一藝者第二
 婚妓第三茶店女第四揚弓場第五橋妻祿き第六船宿第七待合と成程此等の業
 業は浮氣商賣お相違ありません堅い物と云つたら答と撥より外に持つた事
 源なく朝から晩まで氣樂に三味線を弾ひて浮氣お話を唄つて酒を飲ま
 少客の相手をして生活が立ち客の容子の好いのは出喰はした時決何の遣作
 お加む頭を縦に挿れば五圓や十圓の金は直ぐ取れると云ふ商賣なれば藝者
 ば至極結構のやうな看へ二六時中寝るのが商賣で左まで六がしくもない者
 を見れば惚れたふりをして手練の手管に客と載せかけてリョヤノとて手の
 掌は尤もめで仕舞ひばそれと思ふ存分金も踏奪くることお出来ると云ふ業業
 は少し寐むぬのを我慢をして客の補助を起さぬやうな廊下を

駈けて廻はり偶々圖部六に酔つて客の扱ひとするのが骨が折れると云ふや
 うなものゝそれも新造に任かせて置いて構ひ附けなれども宜しいと云ふ娼妓
 も随分氣樂のやうに看へペラ／＼とる衣物を衣て二階の坐敷を駈け廻はり
 程好く世辭でも云つて酒肴を持運びそれで纏頭の五十錢も貰らひ客の歸つ
 た跡では肴の荒らでも舐つて残り酒でも飲みながら俳優の好し悪しでも評
 判したり情郎の惚けでも云つて通られると云ふ茶店女も随分氣樂なやうな
 看へ白粉を面うら襟類までユラ／＼白壁のやうに塗り立て、華語と唄ひな
 がら客が通ふれば一寸容子の好ひ人お寄りなさいよお寄りなさいと云ふた
 らお寄りなさいよ素通りとするど取附きますよと嫩少年どもと引摺りあは
 せて十錢づゝも巻きあける揚弓女も随分氣樂なやうに看へ旦那の機嫌を取
 夜のお伽をするばかりで月に七圓のら十五圓づゝも貰つて衣物も衣せて貰
 ひ旨い物も食はせて貰いお負けゝ相應な物觀遊山もさせて貰ふと云ふ權妻
 も随分氣樂なやうな看へお客を釣り込んで好い藝者ども取持てば案外に金

好儲かり自分の桶屋の側も坐つた切りで酒とビヤ／＼飲んだり煙草を吸
 け／＼吹ふしたり大概は人を使かつて用が足りて生活が立つと云ふ船宿や
 待合も随分氣樂なやうな看へ此等の商賣に實に結構のやうなれども亦夫れ
 へ人に云はれない苦しい事が多くなると側で看たやうな譯けに行ふず
 殊に女の家業であれば少々不都合な事があつても先づ大目お見てやるべしで
 ありまする二ツの翠丸をぶらさげ殊に利口そうな面をして居る野郎社會に
 右等の浮氣商賣とする女も劣つたものが澤山あるには實に驚かざるを得
 ずでありまを試みお生開化の生意氣人種を看よ工業社會にも學藝社會にも
 商業社會にも近來此人種の次第に増殖してツラ／＼と其社會を經廻りある
 き故魔化し主義で人と瞞着するのを商業といたし少しも取り止めのないも
 のがありますと此等の人種が何事も知つたふりとして實業の妨害をなすこと
 は毎度實業家の小首を云ふ所でありますが此等の浮氣商賣はサツリと止め
 て貰ひたいと考ひまを其甚しきは政治世界にも其日暮らしの浮氣商業をや

らびし先づ今日さへ氣樂に踊りでも踊つて暮らせば明日のどうでも好むを
 大浮氣ものが現はれましては其人を頼みに思つて居るものは乞兒馬車も載
 せられてガッソク然と今も覆へざるゝのとハツクと思ふて乗て居るよ
 りも安堵が出来ません何と云へば若しも明日の事お頼着がなれした日には
 改せんな目お遣ふかも知れず實に劍香て溜らさればなり孰れにも浮氣家業
 を決して好いものはあいに云ふことは知れ切つた話しあるに依つて是れも
 浮氣家業のサマリと止めおし政治世界の浮氣家業は最も止めて貰いたい
 と存するなり(ヒヤク)

○保安條例を讀んで感あり

明治二十年十二月のシカも大晦日に掛けて政府が突然と保安條例を頒布さ
 れ即日に行行して五百人ばかりの壯士が東京拂ひとなつた事は随分世人の
 耳を驚おし正しく目に見たものは膽を潰した一件でありました此事は我
 政治世界の一大事として永く臆お記すべし事でありました此條例に依れ

ば亂暴でも起こしをうなものは遠慮なく、東京外へ擲み出す法律で
 最早亂暴主義は免さぬ精神でありませうのら或る部分に向ては随分手痛も
 窮屈も感おしましたらうし又種々の議論もありませうが畢竟此條例を作り出
 したるものは矢張り我々人民の舉動の穩らぬが元素であつて政府は眞
 摺むを得ず此條例を出したものと考ひます政府ごらんと云つて村には事
 成るだけ穩和と欲するは聞ふまでもなく如何に亂暴の卵を孕んで居る
 ぢぶがらと云つて片端から擲み出すのは想ふに心地好しと云ふ譯けではあ
 りませぬが打捨て、置けバ亂暴の卵がハナリと破れで飛んでおる譯動が
 れつ始じまらうと認めた以上は宛らも爆裂彈をアナラにもコナラにもゴ
 ン、轉がして置くやうなもので實に劍香で溜りませぬのら卵の破裂せざる
 以前に夫れ、始末とあされたは御尤至極の事此道人は決して非難ハハ
 たしません何となれば前途に望みある壯士諸君が少し我慢として腹が立つ
 事がありもしやうが短氣や癩癩を起さず正々堂々の道理に由て進歩を遂

かしから保身條例も出まじきに畢竟は壯士等が政府を促して此條例を出
 さしめたるの感じあればなり左すれば其罪の歸すべき處は壯士輩に在りと
 云ふより外なく實に東京拂ひも已むと得ざる事かと存じます
 又手此道人が生意氣にも人並のやうに條例と讀んで感ありなど大袈裟に
 説き出した次第は餘の體にはこれなく唯た壯士輩ばかりでなく實に妨害の
 卵を孕んで居るものは總べて此通りに搦み出すとも又悉拂ふとも又いその
 卵を卵焼きしお食つて仕舞ふとも孰れにも妨害をなさん内に始末をいたし
 たいと存するなりシテその卵は鶯の卵か鴉の卵か此等も随分妨害をなすお
 依て卵の内に退治せよと申すのかとお尋ねなされる方もありませう成程鶯
 鴉も社會の妨害をなすには相違ありませんが高の知れたるお三の油豆腐
 を擲つてお神さんに叱らせるとお權兵衛の詩いた種を扭くつたといふ又は
 トンビトロ、とやらおしるから東京見物お出掛けた僧夫の天窓へ糞と放り
 掛けたとか又は芳原の花魁がアノ鴉が實憎いんぢやますよアノ鴉が啼いた

ばおめで可愛い情郎ときぬくの別荘になるんぢやますなど、女郎買安を
 妨害する位いの事なるを以て先づ鶯鴉の卵は勝手に孕ませ置くも左まで害
 をなしませんか他に社會の妨害をなす卵が幾らもゴロ／＼然として轉り居
 るかど考ひます道人の如き吹けば飛ぶやうな臆病ものは實に劍呑で溜りま
 せん幾度衛生の講釋として聴かせても幾度性命は二ツとあつたものにて大初
 なるよ依て注意をしると説諭しても屁とも思はず成るだけ毒にありそうな
 ものと食つて掃溜おは遠慮なくアノ／＼悪臭を放つ腐敗物と山のやうに溜
 めて置ても平氣の平左衛門を氣取て居る裏店社會の下等人は是れ夏に赤
 どゴロ／＼ピナ／＼的の虎列賊を出す卵なり借又此人間の大切なる性命を
 預り居るものはお醫者なりお醫者は良い藥を賣つて危い命を助ける事もあ
 りますが又不適當な藥を飲ませて危くない命を危くする事もあるに依てウ
 ツカリお醫者の藥も飲めなれば諸君も先刻御承知の通りなるを以て世の交
 明に進むに連れてお醫者の大切なることを知り何れの國までも醫學の研究

秘密となり我邦に於ても何れ最も進歩したると云ふは第一醫學でありま
 う最早歐中毒庵老や米久良盲的老の如きものは都會に一人もあるまいと思
 ひの外今猶頑を乎として神農論を主張しお負けお藥の嗜み分けも甚だ覺束
 なゆ先生とのが随分澤山にあり其持論を承れば成程西洋の藥は利きも宜し
 むらん愚老も内々腹の中では迎も及ばんとは存し居れども何分負けだを云
 ふのが此匙に對して殘念至極に存じ此匙の續るん限まば桂枝葛根を劑も通
 むを決心なりナト病理には暗いに依て折りく劑を殺すこともあらず
 必も年々に人間の數が殖へるに依て愚老等が少や劑を殺しよらと云ひ
 左かて差支ひもなるらうなど、申す醫者とのがあるやうお想はれますが暗
 し不幸にして此愚老的の匙に懸つたら大變ソレコソ唯つた一つの性命を殺
 せる、やうな事があるに依て是れはナト古ゆが安達が原のお婆さんのお卵が
 若くハ三津の川の婆さんの、卵と云つて可なりせありませう是等は保安條例
 を頒布して早速さうとう方と附けて貰ひたいと存するなり又年中最良を云

本定の家業をなくヌとして居るに依て相應の貯蓄でもあるかと思ひ
 ば素寒貧的なれども飯を食つて居るのや實に不思議と云ふべきものゝ腹算
 學者の統計お據れば一町内には無慮五六十人はあるとのことなり九間には殊
 いで食ふが當然にて唯たオラとして居つて飯の食ひる道理がなきはも
 らす此一種怪しき人種が夥しくあると云ふは奇妙頂來なれども到底正實
 事をせぬは極つた嘶しなりホメヤリして居るやうでも何か旨い金儲けはな
 ららぬの正直に歩いて往つた日には迎も旨い事のあるべき筈のものではな
 い何んでも人と誣みして只た錢と取るのが上策たなど、飛んで南の太
 くしい量簡を出し遂には詐偽の卵を孕み甚しきは撈兒の卵や湯屋の板の
 間稼きの卵などを孕みぬぬ實に匂呑な人種なり依て無職業の者は保養
 條例と以て不善の豫防として貰ひたいと存するなり又一種奇妙な手段は不
 暴富的の部類に違ち居るものあり此暴富的は五萬や十萬の金に困らぬを
 以て大概の事はやつてのけることが出来るると云ふ白負必りらその怨の深い

ことは如何なる測量學者も測りきれない。依て一生懸命に搦むを目的とし、
 その癖、自負紳士の仮面と被つて學問も何もなんのにもオツと上等人間と氣取
 り一寸押し出した處を見ると随分値打がありそうに看へども其根性の穢な
 いことは丸るて乞兒も同然何事にも手を出して搦まんとはするもの、なる
 く、猶、人間でありませらば自分は懐手として旨い事を目論見む奴はない
 ろく、と眼を皿のやうにして行き馬矢でも人が撈ふのを見ると直ぐ傍ら
 奪ひ取らんとするが此人種の慣手なると以て偶々千辛萬苦して一の事業を
 起さんと目論見むものあるを看ると成程是れも可なり錢も儲ふありそうぶ
 と忽ち此暴富的が相談して傍らヲヨロリと其事業を奪つて仕舞ふのを得
 意のやうふ心得居るは實に狡猾極つた次第ならずや千辛萬苦して事業を目
 論見むものと補助してゐる假令ひ名ばかりでも紳士と云ふ金看板に對して
 尤ども聞へるがそれをツルツルしくも奪ひ取て澄ました面として居るとは
 亦是れ社會の妨害なることは明白にして遣人は之を大驚の卵なりと認む

たをなり此卵も是非保業條例を以て嚴に懲戒を加へ再び懲の爪を他人の考
 ひ出した事業に出さしめざるやうよして貰ひたぬと存するあり(ヒヤ)大
 ぢや又極々高いのが三百文で百五十文より只の五十文位の代言人の假面
 を被つたものが夥しくあるやうに存じませが此三百的の法律るとは眞暗ら
 で唯だ少々饒舌の人の難儀なるのは屈ども想はず二六時中公事や公
 事はありませんかと買ひ出しに立廻はり示談でも埒の明くものを法廷へ擲
 き出させ其風儀以外の外宜しあらざるものがあるかと存トますが以後は法廷
 に於て三百とお認めあるもの、親戚で傍坐るの雇人で候うなど、嘘と突い
 ても一切代人を許さず屹度取締りをして貰ひたぬと存するなり是れは健
 訟の卵なるお依て保訴條例でも出して退治いたし又近來花牌が大流行とな
 り到る處に時ならぬ花と散らして居りますが是れは敢て咎むべき事でもな
 く勝手にやらせても差支ひありませんがどうも博的卵を孕んで居るか
 と思はれ又名は料理屋でも僅か九尺二間位の處、看板を掲げその坐敷の

我々制に白粉頭が白粉をべたく、蓋つて二三人も居る處があるやうに、
支那が是れも怪しい地兒的の卵ではあるまゝ、存するに依て保俗條例な
ども亦要用であらうと考ひます。此外にも能く眼を注ぎましたなら保安條例
の變則を煩はしたいと思ふものが澤山あらうかと考ひますが、唯だ劍呑なの
は暴亂の卵ばりてはなからうよ、依て順序に宜しく願ひたいと存するあり
じや〜

○敵なきものを倒し易す

此等敵と申すものは我に害を加へるのが目的であり、まするら若しも油断せ
ず、とボッコ頂戴なともあり易く、又は出し抜けに胸倉を取らねる事もあ
りませうし、又ハ不意お兩足と杓くどれてスツタンドを倒さるゝ事もあり
ませうよ、依て敵を持てば一秒時間も油断が出来ず成らうことなら敵のな
方が自己の爲めのやうではありませうが、道人が少し捨つた考ひでは何事に
も敵があつた方が寧ろ自己の利益であらうと考ひます。毛唐人の變則は、

敵國外患なきもの、國常に危しなど、申してあります。此變則はな、
味いがあるかと考ひます。成程全世界に敵なしとなりましたら第一軍備など
は急り勝ちとなり、大將と始め兵卒までが毎日居眠りとして居るやうになり
肝腎な鉄砲も用がないに依て新發明の兵器を製する事のあひのは勿論有り
來りの品さへ、鎗を生ヒッレコッ妾を以て馬に換ひ脾肉を生ずと云ふ有様と
なり、軍艦も飾りもの同様となつて、年中海の上へ住居するのも氣が利かない
艦には二三人の番兵さへ附て居ればそれで事は欠かんと、毎日上陸して、
クラ遊んで行くと云ふやうになり、機關手の名はあつても、機關を運轉する
のは甚だ不得手で五坐るなど、云つても濟むと云ふ筈にも、棒にも掛らぬ情
兵ばかり増加して、若し一朝事あるに至らば物の見事に打破らるゝは、知れ切
つた事にして、遂には國も取られて仕舞ふでありませう。今日各國とも兵備と
嚴にし、頻りに兵と練り、武器も亦競ふて便利の兵器を出せと云ふは何故で、
りませうか、實に四方皆な敵にして、少しでも隙があると、忽ち破らるゝは憂ひ

あるが故でありませう。喩ひば佛國は獨國と云ふ大敵あるを以て油斷せず。獨國は亦隣りに魯國と云ふ大敵あるを以て油斷せず。其魯國も英や澳や伊や普な敵となる事なしとも云ひず。怯弱なる學者こそソも云ふと万国公法を據き出し如何に強國といへども猥りに兵力を以て他邦に迫る事はない好むや。迫らんとするも万国公法が許さん万国公法さへあれば安んぶなど、途方もない量見違ひを申せども万国公法などとは唯た名のみにして今より千年も過ぎて黄金世界とも申す時代になつたらいざ知らず今日よ於ては冀の役にも立たないと申して可なりでありませう。今日は實に腕力世界ではありませう。んる弱肉強食は社會の常にして如何に口でバあり道徳を唱ふも信用が置るべきや去れば各國皆な歳入の六分を費やして陸海軍と皇張するにあらざるや。優勝劣敗は何れの世たりとも免るべからざるを以て常に敵の天窓を飛び越すの心懸けなるべからず。現に我邦の兵備今日の如く稍や整頓と致したのは自然に生じた結果でありませう。が諸君も必ずソウソウと唱ひるであり

ませう。我邦今日の兵備は實に雨の夜にトホホと流れ込んだる亞米利加唐人と云ふ敵が出来ると中おも髣髴深いヤヤガタラ唐人もやつて來ると云ふので是れではならんと奮發した結果でありませう。又兵力バありでなく百般の學藝な色も皆な敵が出来て來て看ると負けたくなぬのが人情の常でありませう。から最初は赤髯唐人どもに天窓から呑まを失敬千万にも我を未開人だ野蠻に少し毛が生ぬた位ひなもんだなど、侮られたのが残念で溜らんらら日本人はお真似が上手だの假聲はなるく、旨いなんのと愚弄半分に云はれても知らない事は仕方がない習ふより外になひと一生懸命に勉強した故に大概は己に結果を看ることとなり月々五六百圓つゝも取られて居つた上に我儘をされた雇ひ赤髯のした仕事も今の我々の手で十分に出来るやうになつたのも實に敵がある故でありませう。國と國と對した時には互ひに敵を持つは互ひの利益となり奮發とも刺衝ともなりて文明を進めることは疑ふべからざるは前にも論じた通りでありませう。が「一步を進めて論ずれば折り」は互

ひに叩き合ひ搦み合ひとするのも大いなる利益があるのと考ひます平和
 く〜と平和ばあり大事に守つて居ると却て怠りを生じ易ひかと考ひます近
 くはナヤン〜國の有様などを看るに佛のクルール〜先生などに随分手酷
 くやられ軍艦も五六艘も撃ち沈められナヤン坊も無慮五六千人も土左衛門
 の管轄地へ轉籍させられ遽に眼が醒めた有様にて何時までも豚小屋の糞
 塗れあなつて寝てばかりも居られんと軍艦も大金を出して拵ひ鉄道なども
 布設することあなつて李鴻章どのは豚の尻尾を押立て、指揮し居ると申し
 此勢いにまはなかく〜ナヤン〜坊と侮つてばかりも居られんと云はれる
 やうにあつたの、全く佛と負けながらも叩き合つた結果でありませう依て
 視ればツトンハマリと往生する場所へ立向ふのもお互ひにドツとも致しま
 せんが折り〜は叩き合ふのも亦富強お益があるのと考ひます
 又手敵の大きなものと先づ是れ位いで姑く措き一國內の事に於ても敵即ち
 競争なきもの、必ず油断し油断するものは怠惰を生じ終るの自ら倒れる

ものは常に其例に乏しあらずでありませう商工などは最も敵が要用にして敵
 なき商工は百年が千年立てても決して進歩致しません一寸とした隙に一町内
 に湯屋が三軒出来たとなれば三軒の湯屋は各々客と引かんと競争とかの始
 じめ一軒が一錢とすれば一軒を九厘とし又一軒は八厘で景物と出すと云ふ
 騒きとなり湯壺の板の間も互ひに負けない氣になつて奇麗にするやうに
 なりお蔭でお客はサツパリした湯へ這入ることが出来るやうおなり湯屋に
 幾分か進歩を與へ又一軒のマツナ屋が殆んど專賣權を持って一個一錢に賣て
 居ると又一軒出来て價は八厘で品も好いとなると一錢の店も忽ち競争して
 七厘に値を下げて賣り出すと他の店では六厘に賣り終りに引合ふだけに値下
 げをして今では一個五厘より高きなく其上品も益を〜改良したるは全
 く敵あるが故でありませう儲姑く五厘とあると需要者も次第に増加して需
 要者は安いものが買ひて製造者も數が賣れて益があると云ふのは實に競争上
 の好結果と云ひざるを得ずでありませう此他何事にも敵なければ進歩しな

いと云ふ中も最も敵なるべからざるは政治世界でありませう一國政府は常に民間に畏るべき大敵あるを以て攻撃せられざるやう注意に注意を加へるを以て其進歩と致るのであります極々肛門けつもんの狭い政事家ら申したから民間でグツグツ理窟を云ふのは痼癢くわつも障ると思ふべく又驚いまくししいとも思ふべく噓々蒼蠅そうらふいとも思ふべく甚しきは政府に向て彼是れ申すのは上と畏れぬ不屈者なり斯る者に云はせて置くと方圖かたずのない政府の事、我々お役人様の思召と以てなざるに依て汝等が啄を出す場所でないグツグツ振かすと澤庵流義で天窓てんそうのらミシシグツグツやらのすぞなど、申すでありませうが是れは獅子頭のやうなものを長い棒の先きへ突掛つぎけて振り立てるから人斬り庵丁あんでいとシカも二本宛ふたへしたものを五六十人ツ、も引連れて行るいた時代の事で今日の世界には正理の許さんばありでなくソツソツな肛門けつもんの狭い政事家は一人もありませんから決して心配はないやうなもの、ヒョツとする政敵を私敵のやうに心得違ひをせるものがあるに依て世の進歩するも益で政

敵は益すく起り且愈よく強くなると云ふことは政事家の臆に記して置て貰ひたいと存するなり然らば政敵と私敵とは如何なる相違があるかと疑ふものもあるべきに依て一應その差別と説き置くも必要かと考ひます私敵と申すのも種類はあると云ふもの、要するに我を悪んで我を害しやうとするが私敵の持前あるを以て我も亦彼を悪くいと思ひ彼と倒さんとするの念を生ずるの勢い免れ難たしでありますやうに八の野郎めが此頃己れの仕事場を取りやかつて悪くい野郎だ今に看ろ敵かたを打てやるのらと熊の勢いに八を窺ひ入るもの、油断はしない今に熊の野郎に出食でくわして看ろ野郎の天窓は打て打て打つ砕いてお負けに其缺片かたは沙利の代りお大道へ敷いて脚で以て踏ん潰つぶしてやると互ひに相狙あひあふ中になると雙方に油断はあつたが一日八公が親方の振舞ひ酒お圖部七となつてなんだ、ペランメイペランメイ己れ達にもあるなふものが唐にも天竺てんたくにも亞米利加にも英吉利にも佛蘭西にもあるものを若しあつたら彈りながらお目にはより下らぬいと大言と吐きながら路次

へ入らんとすると何ぞ思はん熊公味伏し居つたのら溜らんイキなり飛び掛つて拳骨を堅めッレコッ天窓も密塵になれと暗はしたのらして流石の八公も不意を撃たれでお負けに脚もヒョロ／＼然たるの悲しさは打たれた勢いで向ふの柱へ又もコッリとやらかシア痛い云ふもの、八公未だ辟易せずなんだ此泥坊野郎めッザケた事としやのんなど罵るより早く熊公は第二の拳骨をボツカリ暗はした上に泥坊とい手前の事だ哩人の丁場を偷みやかつてと互ひに雙方摺合ひと爲り遂に血塗れと爲るの類と即ち是れ私敵でありませう政敵は決して右様の野蠻なものでは無く敵とは云ひ其實と政權を狙ふ民間の政事家と云ふお過ぎません故に内閣員もウツカリして居ると政敵お攻められ正理の戦ひに失敗を取れば内閣と引渡す一條になると以て常に油断なく其職を盡くそこと、あり随て又政治の腐敗を來たその憂ひなく政府の爲めお一日も欠くべからざるものは政敵なるをも省みず此政敵と私敵の如くに思ふに至ては其政事家は取りも直さず政府を我私有物と誤解せ

我私有物と奪はんとするものは即ち我仇敵なりと云ふに至り遂に政敵退治をやつやすやうなことで至るなしとも云ひず是れ文明世界の政事家に有るまトき量見違ひなると以て今の政事家にソツな理窟の分らん男はないと信するもの、敵と名の附くもの自然悪いと思ふ考ひの起り易きものなるを以て尙其心に戒め置くことを宜しあるべし然らざる時はッレコッ大變が押始まらないとばかりも云ひないに依て敵の講釋といたすこと爾望(喝采)

○自負紳士の頂門へ一本参るべし

昨日のお装束は二ツ子糸織の上衣お黄八丈の下表三枚をツロリと重ね羽織は博多織り若くは極上等の黒七子今日のお召物の綾羅紗の洋服に純金の時計と鎖長がに胸に懸け黒塗りの自分車に乗て虎の皮然たる「モヘル」と膝掛などなし手前抱ひの車夫を走らせて市中を横行と申す程でもあいが意氣揚々として奔走するものは一目して諸君も御承知ある當世流行の自稱紳士なることを知るべし此紳士との、内よは相應れ財産を持って居るものもあり又内所

は火の車を轉ばしゝねて居るものもありませんが先づ概して云ひば錢も困らぬ部類の人である兎も角も紳士を自負して居る以上は夫れ相應に外面も飾らねばならずマサカ一文なしのものが出来る事にあらずと信トます又手此紳士との、頂門へ一本參ると申すのは利口振つて威張り居る面が憎いの又は自分のみオツと高い位地に居るやうな顔色が愛らしくないに依ておんこ進上致したいと申す次第にはこれなく頗る高尚な事に關して是非一本參つて置きたいと存するなり开は他にあらず政治上の働きに於て此紳士が何事にも己れがくくと出しや張つて口も出し手も出す癖に政治上の事と云ふと余は元來政治世界に立つものでこれなく余は商人である余は事業家であるあと、云ひ抜け毫も顧着せざるれみか甚しきは余が政治上の事に口を出すと或る筋への聞へも悪く仕事をすることも甚た仕悪くいと云ふに云はれぬ事情があるに依て政治論は眞平御免を蒙ると勿々に遁げ出すなどは荷りにも紳士と云ふ看板に對して甚た不都合のと存するなり歐米諸邦の紳士は

決して簡様な腰抜けにあらず他は人民に率先して政治上の奔走をなすのみならず他の人民は此紳士等が誘導されて政治の思想なれたものも政治を論ずるに至ると云ふが通り相場なるに我邦の紳士とののは之と反對の有様あるは實に一本參らざるを得ずではありませんる全く政治の思想もなく平々凡々たる芋虫同然なる人間なれば假令ひ少しばかり錢があつたらと云つて社會に對しては一錢あしで極々下等の下宿屋にゴロついて居る小理窟を云ふ青書生にも劣る万々であります失敬ながらこんを利己主義より外は何の公益もあさんものゝ紳士の様を與へ置くは甚た勿躰ない次第にて紳士其者より云はしめなば斯る無氣力人に余が貴重な名稱と倫まされてハサテモくも嘆けらわしいと電大の涙とポロリくと溢して泣き出とであります是れは泣くのが道理であります宛るもヒカカカ光る勅任官の大禮服を無學文盲屈茶々々の車挽きよ衣せるやうなもので大禮服は實に嘆息すべきではありません併し既往は咎むべきにあらず今日まで卑々屈々無氣力極る

有様で居つたを咎るも詮なしと存すれば彌よ紳士を自負するとならば明日より政治世界に向ても紳士らしき働きとして貰いたいと存するなり國會も最早儘かに一年を隔て、彌よ押立つことになつて看ればグツグツして居る場合よあらずと信じます去りながら自負紳士のお株として己れよ不利益なる事は知らぬふりをし見ても見ぬふりをするが通常でありますのらして婉曲に忠告をした位いの事で目が醒めやうとも思はれず依て一本ボンゴツ進上をやらかしてお氣の附ゐる、やうよいたしたいと存するなり紳士お對しては入らざる御世話糞でも食へど云ふ威ヒを興ふるものは知れされども如何に蚊鳴怪化の世の中でも猪狡を働いて金を掴むばかりが功能でもあるまい畢丸も釣り方と云ひば少しは社會の爲めに盡力して貰ひたいと存するなり(ヒヤ〜喝采)

○奴隷社會の主權者ハ人類の外に在り

裏店路次の窮る處に九尺二間の豚小屋同然なる毀れ長屋と借り産襦を纏ひ撤れ席に坐し一碗の粗飯に飢ひと支へて安樂と呼び一瓶の濁酒に酔ひを借りて愉快と叫び之に従ふ山の神は其面唐茹よりアクボコあして其色炭團は其黒く鼻は獅子の鼻を欺き尻は大豚の尻よりアツカイではあります宿六の目より視ると西施揚妃も及ばず衣姫小町も脱して遁け出す程の別嬪も思ふでありますせう而して其所有品は何があるかと検査すれば釜兼勤の古る鍋と七輪兼帯の畢丸火鉢と他に塵芥と蚤虱が澤山あるばかりで如何に検査委員が眼珠を皿あして改めても所得税の取れやうのない生活といたて居りましても猶是れ獨立の民に相違ありません又之と位地反對にして都下でも繁昌の地に巍々たる樓閣を押立て美服は以て身と煖ため珍味は以て口に飽きソレコソ西施のやうな滅法美なる本妻のある上お揚妃れやうな頗る婀娜ボイ權的を置き寶貨珠玉は庫に盈ち伴頭丁稚は店よ喧しと云ふ身代でも亦是れ獨立の民であります唯た其獨立の點に至ては裏店の獨立のと異なる所はありません唯た彼は赤貧乏あして是れは金持ちと云ふまでの

ことでもあります。が世人が皆な裏店の獨立漢を賤んで蛆虫同然に視み縮ぢり金持
 を尊敬して紳士との絲瓜へちまとの申すのは如何なる譯わけけであります。う實に是に
 嘘うそも懸値けんちもない人類の根性は業に已に金錢の奴隷となつて居ります。うらし
 て其人を尊敬するのではなく其金を尊敬するのであります。去れば庫に巨
 萬の財貨を積んで大紳士と尊ばれ大威張りに威張り散らした者でも一朝大
 損失をして庫が売かぶなると紳士の稱號の忽ち削ぎ取らるゝのみならず復た
 屢しばしばも放掛はなるものはありません。實に人は金錢あるが故に尊ばれ金錢なきが故
 に賤いやまれ金錢の爲めに馬鹿も利口も看へるとは等ふべからざるの現象であ
 ります。道人は此現象を看て常々嘆息に堪へません。人類は貴重の靈魂と天賦
 の才智を所有し口を極めて壓制束縛を罵り舌と爛やらして自由權利を唱ひ卑
 屈ひく奴隷は聞くさへ癢かに障ると喋々理窟を云ひながら其身は臍帶そいのと切た日よ
 りして金錢の奴隷を爲て汗あせ水みと滴たらして死ぬまで使役さるゝと思ひば又涙
 交まじりき事でもありませんか併しヒカ／＼光る正金銀の爲め使役さるゝの

か亦姑く我慢もすべしとした處が今日マ／＼然たる紙幣の爲め使役さ
 るゝと思ひば人類も案外に安やすいものではありません。高帽は山を低ひく
 しとし美髯は虎を弱しとする。或る社會の人物と云へども亦是れ金錢の奴隷
 のみ其証據には若し一文も與へず勤勞せよと云はゞ三日を出てすして忽ち
 大不平を起し十日ならずしてサツサと辭し去るであります。畢竟は〇〇の
 貴きにあらず金錢之に附帶するが故に貴しと云ふも可なりであります。〇
 〇また既すでに然り況んや其他をや幣間金錢が欲しい故に常に美髯の塵を拂ひ
 妓流金錢が貰もらひたいが故に忽ち足が滑すべて轉ぶなどは固より怪む足らずや
 はあります。が人と生れ金錢の奴隷と爲るは決して人の本意ではあります。ん
 寧ろ金錢を奴隷にすべきであります。う金錢は物品交換の媒介者たるに過ぎ
 ません。金錢を舐なめるも飢渴を支ふべからず金錢を抱くも寒暑を防ぐべからず
 要するに一種の金屬たるのみ否な物品に従ふ奴隷のみ去れば人類は勞して
 物品を産出すれば金錢の招かずして自ら集るの道理があります。彼れよ

り來て我に従ふ者は即ち我の奴隸でありませう我は金錢の奴隸にあらず金錢我の奴隸に歸すと云ふも可ありでありませう人の交際も是れと同一の道理にて其金錢に交らずして其才智を交り其金錢を尊ばずして其人物を尊ぶこそ吾人の本意なるべきに人の狡猾に走り貪婪を流るゝや全く之を顛倒し金錢あれば親み金錢なければ疎んじ其人情の薄すつぺらなること實に彼のペラ紙よりも薄し今人の金錢否なペラの奴隸と爲て甘んずるも亦甚たしと云ふべきではありませんや噫や奴隸乎く既に奴隸の根性あるものは終に獨立國を以て他國の奴隸と爲すが如き大いなる量見違ひをする者しとも云はず斯く輕薄の世の中となりては實に劍呑で溜らざるの思ひあり故に聊の金錢奴隸の世態を説くこと爾り

○人間万事意氣地の説

誰の云ふ意氣地は負け嫌ひ七分と我慢三分との結合物のみ毫も義氣を含ませずと此説固より非なり(ノック)決して(ノック)ではありません全歸意氣

地は人の美德とも云ふべく男女の別を問はず無くてならぬものは此意氣地でありませう人に意氣地があれどそれれば技藝も進まず公益も起らず終に木偶人と一般なる無氣力人を以て社會を填るに至るでありませう野暮な人間は此道理が分らんに依て慢りに意氣地を誹り意氣地は花柳の地に住む者が糞意地と張るに過ぎず喩ひば藝妓仇吉が(ノック)した丹次郎に惱れ折角縁を溜めた應來賃を擲て飽くまでも嘗めやうとするも米八も羨ましくなり借金と質を置き火の車を家へ轉じて丹次郎を靡かせやうとすると丹次郎と元來一の氣節もなく唯た面の生白の頼みおして女で飯を喰ねふと云ふ舊世界に醜跡を留めた姦童れやうなものなると以て忽ち米八に粘り着くと仇吉の嗅き出して齒噛みをなし幾度のクヤシーを叫び大事のく色男を奪はれては朋輩に合せる顔もあらず緋禪の手前も取返へさるべからずと忽ち糞焼けを起し三味線を叩き賣り緋禪までも質に置き眞裸と爲つて丹次郎の需索に應じ舊の粘着力を挽回しやうと掛れば米八もなか／＼屈せず家

財と賣り盡して復た賣るべきものなきに至ては一個の丹鼎までも密賣して
 仇吉と顔頑したる結局の女郎屋へ身を沈めねば又旅猫と爲て田舎を駈け廻
 り丹次郎も亦飯の種と失て無頼人と爲り夜なく己れが曾て實驗したる明
 け鳥の半曲を戸毎に賣り去て纒前に露命を繋ぎ甚しきいノヲレ死ふと爲る
 が落ちなり且つ此二匹の猫が競争ひ引ッ羅つて誰のされ馬鹿な目み遇ふも
 のは少くも五六十人位いはあるべく意氣地の効益果して焉くにありある放蕩治
 郎の女郎を争ふも亦是れ同一理おして身代を叩き潰ささるもの天下果し
 て幾人ある丹田無毛的の白狐を争ひ我は眞の情郎筋である我は既ひ起証
 誓紙までも書いた夫婦であるあと、互ひに自惚れ合ひ白狐が一枚の舌に載
 せられて限りもなく鼻毛を伸ばし祖先傳來の財産をメチャクにして深
 海に陥るものは假令ひ三つ蒲團の上の粘り方が好いの御馳走筋が別段である
 のと云ふにもせよ此は白狐が手慣れた騙術と云ふものなり天下女郎の數の
 夥しき或は眞の情郎筋も一人や二人はあるべしとするも大概其情郎は鼻毛

を伸ばしてセッセと通つて來る治郎中より撰抜するありあらで奮夫と云
 落戸に係り設ひ此輩と意氣地を張り合ふとも果して何の益ある要するに
 意氣地は色情張合ひの最も墮墜すべき醜徳なりと是れ意氣地を非難する論
 者の定説でありますが此説の如きは其一を知て未だ其二を知らずと云ふべ
 しであります假りあ一步を野暮論者に譲り意氣地は妓流郎を争ひ治郎妓を
 争ふの張合ひ主義お過死すとするも尙且多少の氣概あつて存し妓流の郎と
 争ふは唯たに惚れた一念のみに關するにあらず粘着權利を奪はれた憤懣よ
 りして發し又治郎の妓を争ふは自惚れの自由を妨害せられたるに起り然らざ
 れば何等の阿房漢といへども豈に一匹の白狐の爲めに惜氣もなく身代を叩
 き潰さすの深海に陥るべきや共に是れ凌辱せられたを憤るよりして起り其
 凌辱を憤るのが即ち氣概でありませう凡そ天下の事は皆な氣概より成り浪
 士囂集して王政復古を謀るや幕府王權と蕞るふし民權を振ふの憤懣お起り
 學生の勉強して卒業免狀を戴ふんとするや亦人に如かざるを慚るの憤懣に

超り上若し壓制と施せば下憤懣も堪へずして自由の意氣地と張らんと欲し
 外人侮辱と加ふれば國人慷慨に堪へずして萬國對峙の意氣地と張らんと欲
 し要するお意氣地は、クヤシイと云ふに外ならず奪はれても壓せられても叩
 かれても黽^こられても、クヤシイと思ふ心なきものを到底役に立たざるなり喻
 ひば我先つ隣りの處女と契つて夫婦約束としたりとせんら他人若し此女と
 横取せんとせば我豈に憤懣せざるを得んや天下婦人に乏しうらざるにも
 拘らず一婦人と争ふて命賭の大叩き合ひをせざるなどい大筵棒^{べんぼう}の骨頂も似た
 れども意氣地上黙することが出来ざるなり方今論者が嘖々然として條約改
 正を論ずるも亦此道理でありませう彼れ我と馬鹿にして横着を働かんとす
 るを憤るの意氣地たるお過さません彼れ益すく手前勝手を主張すれば我
 は益す意氣地と張り彼れ我と侮るに屁の屁を以てすれば我れ亦彼れに與る
 お糞の糞を以てするもの何ぞや實に際限もなく赤髯どもに跋扈さるゝのが
 殘念で溜らんうら起る理屈でありませう然るに野暮論者が貴重ある意氣地

を以て軍に色事に係るものとするは大いなる誤解でありませう人間万事唯た
 意氣地の世界と云ふべき有様にて人若し新橋の上等寐兒と組み伏せて抜け
 駆け功名と嫖客社會に顯はさんとすれば我亦柳橋の頗るく別嬪を押し倒
 して天晴れ浮き名を好色社會お流さんとするが如きは決して褒めた事では
 ないは勿論なれどもマア意氣地と云ふものはハコシナものでありませう近來
 我邦も文弱は流れた譯けでもあるまいが餘りお利口振つて意氣地と云ふも
 のが晝寝をいたして居るゝと思はれ國家の爲め甚だ心配に存するに依て意
 氣地の辨を試ると此の如し(ヒヤく大ヒヤ)

○戯れに猫の尻を戒む

咄つ汝妖猫は猫屋新道に小暗き巢窟を構ひ地獄屋かと思ひバボンヤリした
 毳燈と格子戸の内に掛けて白吉赤助などの名を掲げ猶眞人間たるが如きの
 是れ汝が頭へ妖の一字を冠せる所以なるぞ全牀猫の本職は鼠を捕ふよあれ
 ども汝の怪しい屏風の外にて却てナウく鼠鳴きとして嬉れしがり曾て鼠

を捕ひしことゝ偶々大店の白鼠を捕ひて其膏血を絞ればソレにて捕鼠の
 職を盡くしたりと云ふのは知らねども白鼠は且那の倉庫と守るもの豈に澄
 りよ捕ひて爲めに帳簿と故魔化さしめて可なるべきや且つ怪むべきは汝の
 性甚だ膻臭と嗜むとは云ひながら鯨と鮪を滅法好んで忽ち咽ひ若くは抑も
 是れ如何なる心底であるか鯨鮪と看れば一尾十二文否な十二圓位いの小鮪
 と雖ども外へのやらしと忽ち其髯を促ひてヤレ掛らんとす鯨や鮪は〇海
 と唱ふる最も貴き水と飲んでお威張りなさるをも畏れず常に之を食餌とす
 るは噫々勿躰至極もない事ならずや又其最も怪むべきは贅物と嘲けらるゝ
 猫の尻尾とヤヤラ〜振り廻はして場所とも憚らず濫りに轉ぶあり蓋し
 汝の脚の弱さが故乎其癖十分に膏血を吸ひ盡くして屁氣を咽はせるときは
 脚にて大きな鯨をも蹴飛ばすも以て視れば汝の脚のなかく〜に健なるあ
 似たり然らば汝はゴロニヤン〜とヤレ着く中に妖術を施すもの乎然れ
 ども唯其れのみにて鼻毛を伸べして性命よりも大切なる金銀を興ある

ものゝあるべきや試みよ汝が鯨などを捕ふる身振りをして見れば宛ら我
 を被つた猫の如く尻を那方に向けて却歩し遂にコロリ〜と轉んで尻を玩
 弄物とされても平氣な面をして居るの蓋し汝の尻癖の悪るい性分と見ゆる
 客は汝の尻の爲めに惜氣もなく大枚の金をツギ込むを以て見れば汝は尻
 に依て生活をなすものと想ひれたり天下汝の尻あるが爲め身代と棒に振り
 一生を誤るものあるとすれば汝の尻も亦大厄介尻なりと云ふべし宜しく戒
 め置らざるべからず汝或は此辯者に向て逆捻と咽ひせん乎足下輩はヤラ
 く〜饒舌つても一文の値打もない癖せよ一種の礦山を固有する妾が尻に向
 て彼是れと妨害論を吐くは人の痴氣を頭痛に病むよりも甚しい入らざるお
 世話お茶でもあられと去りながら礦山は掘て金を採り汝の尻は我より掘る
 にあらず他の手を借りて金を採るを以て云は〜反對の採掘なるを以て終に
 は其尻破れて自家の醜態と露はすのみならず客の名譽と身代を併せて大鏡
 棒の棒も振らしむるに至る汝の尻金あると雖ども亦少しく慎むべし咄

○油断大敵は何れの時代よも記臆せよ

油断大敵と申す四文字は乳臭兒も能く諳誦し屁のやうな諺めて珍らしくもなんともないやうなものではありますが天下れ災害皆な油断より生ぜざるなきは小學校の生徒も能く心得居ることなるを以て油断うら出た大敵と捕ひて一席辨じますのも亦決して無用の辨でいあるまいと存じます(謹聴く)油断をすれば忽ち大敵を生ずと申す適倒を舉れば振武將軍勇を恃んで油断とすれば忽ち不意を襲はれて大敗取れ取り政事家と權を恃んで油断をすれば政治忽ち腐敗して子々を生ト金持富みを恃んで油断をすれば忽ち奢り度に趁ひて貧乏神を招ぎ商人才を恃んで油断をすれば忽ち駈け引き機を誤つて一敗地に塗れ學生油断をすれば勉強煙と爲て懶惰身を誤り著者油断とすれば筆鋒忽ち法に觸れて禁罰を頂戴し閨門に油断あれば油虫忽ち權夫人と嘗めんどし深窓に油断あれば悪る虫忽ち箱入娘に着るんとす阿三油断して居睡りをすれば飯を焦がし小僧油断して路を歩けば爲に油豆腐と毒を

る油断大敵實に怖るべしと云ふ中にも攝生に油断して不時の病を招くは最も怖るべしであります其又最も怖るべきは虎列的であります虎列的は全く油断より生ずる大敵でありますが此大敵ばかりは各自浴く油断せざるやうに注意いたさんと忽ち侵入し一人の油断よりして貴重の人民を限りもなく冥土へ送藉するやうなこととなり實に怖るべきの極點であります此大敵は何れの年にても暑に當て油断をすれば忽ち直入をべきを以て腐敗物は食ふべからず暴飲暴食はなすべからず惡臭物を散積すべからず身躰と清潔にして飲食を慎むべしと云はゞ其講釋の百も承知二百も合點なりと云ふべきがウ云ひつゝ油断として大敵が襲來してより遽に錯愕狼狽するが常なるを以て虎列的の用心の寒い時から手配をとして置くこそ始めて油断なしと云ふべきであります近う近く一例と舉れば政治世界に一生懸命と爲て奔走し其議論もなか／＼筋が立て強く人間もシツカリして役にも立つべく且の注意の至れると云ふは人民の大半が國會ナウものは黒い貝やら赤い貝やら無茶

苦茶に心得居つた時分より率先して國會と説き其論論がどうく貫いて彌
 一二十三年は國會を押立てることゝなつた程に間断なく働いた政事家でも
 最早理窟さへ云ひば大概の言は通ふると油断してナトやり過ると忽ち昨年
 の暮れは突然保安條例と云ふ大敵が現はれ散々敗北どころの少し怪いもの
 は片ッ端ら東京の外へ擱み出されたるにあらすや油断大敵の怖るべきは
 斯の如きものにして若し我々が油断して我邦れ文明も最早進歩したとの學
 問も開けたとの生意氣な言を云つて居ると俄然如何なる大敵に出食はす事
 なしとも云ひすれ互ひに油断せず用心に用心を加ひることを肝要なり去れば
 轉ばぬ前の杖になるかならぬの一言申し置くこと依て件れ如し

○嘘を突くべし嘘と嘘にすべからず

嘘は元來有りもせぬ事を有るやう云ひたて人を欺くの主義なるを以て好
 んないには相違なし去れども諺にも嘘も方便と云ひることあり天下の人唯
 たの一度でも嘘を突いたことがないと云ふものは恐くはあるべしとも想は

れ否な決してなしと云つても可ありでありませうが嘘と嘘にせき人の
 信用さへ失はぬやう巧みにさへやれば左まで害もなあるべき乎一寸とした
 事なれども淺草の奥山の湯島の天神へでも往て御覽ささい店前に翠簾を下
 だし二三の粉頭がコテ／＼白粉を塗りたて、白狐も糞と食へと云ふ有様に
 て世辭と浮氣を資本として晝生や少年と釣つて居りますのは御承知の揚弓
 店でありませうが此揚弓店に居る女は何であるかと試みは其素性を洗つて見
 らば年十有四にして早くお轉派と始め十有六にして色男を拵ひ十有七おし
 て揚弓店を巢窟と定め其尻の輕いと舌の滑があるに至ては應來藝者も三會
 を避け地兒的も及ばそと云ふ貨物で其少年と釣るの巧みなるは愚弄七分嬌
 媚三分でとう／＼釣りわけさるはなし一の白狐的が少年を呼んで容子の好
 方おはいんささいよと云ひつゝ、小聲にて楳の下へと云ひバ他の白狐的は
 又呼んでおわかんなさいよ容子の好い人と云ひつゝ、亦小聲になつて屋根の
 土へと其愚弄は概ね斯の如くなれども之を沈黙して客を待つものに比すれ

は嘘がらも呼ばれてゴッコリやられた方が感心の強い人情であります
 らして揚弓店は多けれども巧みに嘘と突く女を雇ひ置かんと辛獲はない
 どのことなり去れば紳士の仮面でも被つて真似目な面として嘘と突けば必
 ず多少の効があるに相違がなうと信じます畢竟するに社會は嘘突きの
 寄合とも云ふべし唯だ同トく嘘の突けども嘘を嘘おせぬものが世の信用を
 得るのであります然るに十中の八九の能く嘘は突けども其嘘と貫くこと能
 はぬよりして世の信用をも失ひ終には大きな馬脚を露はして笑ひものとな
 るのであります若し夫れ嘘を大にそれば牧民者にして尤もらしき言と云ふ
 も万一倍と失は、如何ん人心忽ち背くであります甚だ不釣合な喩ひなれ
 ども牧民者も亦媚ひを賣て少年を誑すが如きものとすれば嘘の固より突
 くべしと雖ども前に自由を興ふべしと云つて後には壓制の局を結ぶやう
 本事があると大害を引き出ることがないとは云はれんであります寧ろ揚
 弓店の姉さんが一吹おあがんなさいよと云ふに任のせ無と置れば果して青

真いながらも一吹吸ひ付てくれるの信を失はざるに執與れ粉頭や能く嘘を
 突いて少年れ心を盪かす牧民者も亦猶人民をして惚れしむること斯の如し
 と云ふ有様ありとするか兎角に官民の間が隔たり易いの甚だ宜しあるま
 じと存するなり偶々揚弓店前を過たり小意氣な姉さんのれ手際と見て感心
 の餘り尻子帯へ書して置いたものを今燒き直して嘘も方便の説をお聴きに
 達とるなり

○色を好むべきも虚飾天地を爲すなかれ

道人情らく、惟んみるに天地は唯だ色のみ造物主固より色の爲めお氣を揉み
 人間最も色の爲めに苦勞す天地若し色あくんば娑婆は忽ち暗みとなり人間
 又何と楽しんで汗を流かして稼かんや唯だ其れ色あり故お苦勞もすべく艱
 難もすべく色の爲めには寧ろ犠牲となるも辭せずであります而して人の
 色を好むは造物主の指圖なり若し造物主にして色を拵ひすんば人豈に色に
 迷ふの理屈あらんや造物主の意の固より色を拵ひて以て人と迷はせ人を樂

しましむるにあるを知るべし夫には日月星辰の色あり地には山川草木の色
 あるにも拘らず雨の淡粧あり烟の濃抹あり晴れには自らの其色あり陰りあ
 も亦其色あり以て天地の色を粧ふのみならず春は花紅柳緑錦綉を織り成し
 て人心と盪らし夏は山碧水蒼活畫を描き出して人目を怡ばしめ秋は丹靑れ
 霜葉綺羅と染め出して以て山林を貴り冬は霏微の雪花瓊瑤を點綴して以て
 露壤を鏤ばめ造物主の色に氣を揉むや既ち斯の如く朝々暮々に其色を變じ
 晴々雨々に其色を換ひ以て人心を迷はさんとす人豈に其着色の美なるを看
 て意馬心猿の狂奔あきと得べきや狂奔すること當然でありませう是に於て
 人も亦種々の彩色を出さんとして衣々の錦綉の美を飾り家には金玉の美を
 飾り燦々爛々として光りは光りと明と競ひ灼々耀々輝々輝々華を争ひ目眩し
 眩暈するに至るも猶未だ満足せず紅粉を粧ふ美人を聘して宴席と飾り媚笑と
 賣る別嬪を倩ふて枕藉を飾り遂に社會を飾り黄金世界となさんとす蓋し是
 れ文明の眞面目たるべきは醉洋先生の講釋を待たざるも亦明かありといふ云

は今日の如く道徳は地を拂ひ狡猾は勝ちを収るの時に際して黄金世界を擬
 むる月界の噴火山より金礦を掘り出さんと企るよりも一層難かるべし此事
 や徒たに云ふべくして到底行はるべきにあらざる莫くは好色の自由を濫用し
 て虚飾天地に陥らしむることあからんと欲するのみ若し夫れ勿躰らし又八
 字の髻と撚り財政は困難に迫れり非常の節減を行ふべしとは口では云ひ
 も其實茶を廢して湯とあし火鉢と止めて「マッチ」に換ひる位に止らば悉く
 味増播り坊主の説法程の効益もあるべきや否な斯る節減の景色を粧ふに
 過ぎざると思ふ嫌ひのある事をせんよりも寧ろ大奮發をやらうして氣
 腹はぬものは勿論役立ぬものは一掃しろと云ふものゝ其實効を擧るの
 甚だ難き亦猶細君を阿三の位地と下たして薪火と取らしむるも一家と爬
 き廻はす權妻の奢りは絶へて節儉の命あると聞ふさるが如く虚飾の嫌ひな
 きまては實効を奏することは甚だ難きのみならず萬事萬端皆な然りと云ふ
 も不可なきの有様あるは實に好色の自由を濫用と云はざるを得ずであり

ませう

今試みに二三の怪物を舉れば勇は關羽に如かず智は拿翁おんぼんに及ばずして唯た其長の髯ひげと蓄たくわやすものは何の爲めぞや家屋の新舊と問はず總べて「ペンキ」と塗り廻はして青白の色に誇るものは何の爲めぞや二三冊の洋書を讀み五六卷の漢籍を讀みし纔たらに其門を覗のぞひたばりて滅法な大法螺を吹くものは何の爲めぞや英雄の偉行を學ばずして徒らに英雄の假聲かりごゑを學ぶものは何の爲めぞや家に火の車を轉く借金かを質かに置かて豪富と粧かふものは何の爲めぞや身に治郎の醜行みにをやらうして口お君子の道徳と説くものは何の爲めぞや權門ごんもん又入いては脊肩せけん諂笑てんせうの卑劣ひりやくとなしながら人お對たいして傍若無人の傲慢ごうまんあるものは何の爲めぞや二三圓の下等時計を買かて之に鍍金めいし外面うへめんのピカピカに誇るものへ何の爲めぞや糊着のり一般いぱんの「セラセラ」絹きぬと衣いて得意とくいに顔色かおいろあるものは何の爲めぞやココ〜紅粉べにを塗ぬて阿多福面あどふくめんを粧かふものは何の爲めぞや價ある純粹じゆんじゆんの綿衣わたぎを笑わらつて脱走縮緬だつそうしゆくめんを喜よろこぶものは何の爲めぞや鹿子絞かじりの根掛

を磨として珊瑚さんごと欺たぶく明石珠めいしじゆを取とるものは何の爲めぞや山に千年川せんねんがはに千年龜せんねんかめとまで甘い辛からいを嘗あじめ盡つくくして猶なほ處女風ぢよふかぜを粧かふものは何の爲めぞや其腰こし處女幸ぢよふさいちいにして瑤たかの輿こしに乗のれば忽たちち奮知ふんちと疎そんして貴夫人きふじんに擬たとするものは何の爲めぞや心に官海くわんかいの富貴ふきと羨あやみながら口に官權くわんけんの奴隸ぬれいと説くものは何の爲めぞや地震ちきんの爲ために震ふるり落おつたるは疑うたふべからざる証跡しやうせきあるあも拘こらず我論わがろん合あはずして去いると云いふものは何の爲めぞや衣いを賣うり禪ぜんと興きやうと續つかに若半錢わくはんせんを得えて以もて女郎ぢやうらうを買かひ勉こめて大盡だいじんを氣取きとるものは何の爲めぞや右みぎに列りべたるもの臭くさきを省しやうみずして却かへて人の屈くつと答こたへるものは何の爲めぞや右みぎに列りべたるもの注しゆ猶なほ是こゝれ外が貌がうと粧かふの虚飾きよしにあらずとなす平婦人へいふじんにして紅粉べにを粧かふは固かたより答こたへべきにあらずと雖なほども低い鼻はなを高くするの苦くるんで美人めいじんの假面かりめんと被かまり人の爲ために看破くわんぱせらるゝを恐おそれて月夜げつやと暗夜あんやにするの惡手段あくしゆんたんを施せすが如ごときに至いたっては沙汰さたの限かぎりと云いふべし矧しづんや忠義ちゆうぎを鼻はなに懸かけて眼まなこ々々中に反對はんたいの振舞ふるまをなすが如ごときものかや好色世界こうしきせかいに生なれて色いろを好このむは我われを決きめ

非難せず唯た上下交もく虚飾を競ふて爲めに明るん天地を暗みとするな
くんば結構と存するあり臆脱げ易き金箔佛なり寧ろ無飾の石地藏に如か
んや是れの大ヒヤ〜

○退去者諸君に忠告と

又手頃は明治二十年十二月二十九日と云ふ日に突然保安條例飛び出して五
百餘名の壯士が東京拂ひを仰付られたりと聞きし時は流石に鼻の高木のが
自慢なる此道人も殆んど鼻が乾し大根的にグニャ〜となるまでに驚きた
れば退去と命ぜられたる御當人はサツやと御察し申したりき此事や實に迅
雷耳と掩ふに遠くあらずと云ふべき乎突然大地震が震り出しと云ふべき乎
寐耳に水と冷やりとさゝれたりと云ふべき乎坐敷の隅より出し抜けに火の
玉が轉げ出したと云ふべき乎實にはや想ひも寄らざる事にて此道人などは
性分が臆病もれゆへ今に心臓は動氣が収まらんと云ひば亦是れ人の痴氣と
頭痛に病むの欺なれども警部巡查が四方にお駆け廻りなされるのを見て何事

が出来たると實に吃驚仰天翠丸を釣りあげて臍の上まで押し込んだと云ふ
噂でありました無關係の我々でさへ斯くまで驚きましたあらして退去者
諸君には如何お政治世界の豪傑を自任せらるゝ方々でも一時の驚きのサツ
ゝし大なとんと想像いたしたり而して諸君の退去を命せられしは如何なる
次第なるか我々の知り得べきにあらざれども幾分が穩らならざる舉動のあ
りしが故なるべしと存するあり否らざれば政府は退去を命ずるの道理あら
ざるあり想ふに諸君は政治の改良に熱心なるより知らず識らず不穩當の振
舞をなすに至りしあるべく我々の諸君へ對して決して彼是れ申す次第には
これあきも諸君は耐忍と申すことの肝要なると忘れ諭ひば熊公八公が我慢
が出来かねで濫りに棒ちぎりを擔ぎ出すの短氣を起すの類ではあるまぬの
と存するなり我慢も事と品に依りてはせねばならず況して短氣なとを出す
のは甚た宜しからざるなり假令は我邦は小ぶりとすも亦是れ堂々たる一
の獨立國なり況んや文明の歩を進めてより僅に二十年を過たたりと云ふに

過ぎずして豈も何事も十分満足を見ることの出来得べきや一家の事は平急に整頓をせしやうとするも出来難たし況んや一國の諸君の考ひにては一日も早く此邦をして歐米の文明國と腕押をして負けないやうにしたいと思ふ精神から出するは知らねども千里の遠きを一足飛びにせんとすれば必ず無理な仕事もせざるべからざるのみならず事必ず危険にして到底處しを達し得べきにあらず寧ろ危険を取らず若く歩を進めて必ず彼岸に達し得らるゝ以上策と取るに如かんや想ふに諸君は我慢がしられぬとて此上策を取らず變則と用ゐよなど、途方もない考ひを起されたる悪結果にあらざるならんや左は去りならん既往の事は云ふも詮なし諸君が前途に就て一言を呈し置らんぞ存するなり

諸君が退去後の舉動如何に就ては世人も深く注目したるべしと存するが諸君の退去後の舉動實に意外に沈着温和あるには我々甚だ感心いたしたるが諸君は流石に政事家だけありて進むは急なるも亦昨非を悟るに速なるもあはれと思はれたり我々が諸君の爲めには願ふ所は此後決して短氣を起さず漸く歩を進めて我文明を増進せられんことを欲するなり諸君は實に前途爲すべきの壯士なり我邦の干城と爲るべき志士なり我々豈も諸君の爲めは諸君の精進を憂ひざらんや然らば諸君は實に大任を負擔するの人やあり故に我々は諸君の爲めに過激粗暴の爲めに有爲の身と誤り志しと達せずして空しく倒るゝが如きあらんを憂ふるなり而して道人が諸君に呈せんとする一言は他にあらず摘んで之を申さしめて決して糞焼けを起すなど云ふに過ぎません此糞焼心を申すものは誰しも多少あるものにて少い息子が女郎買ひを始め七親父も此の成る程女郎買ひは宜しくない金を取られた上に放蕩の身を待ち崩し何事にも懶惰が易きものなれば悪事をしたり親父の意見に従ひ最早フツツと死に切るべしと昨非を悟れば甚だ結露なれども斯かる息子は甚だ少れにして多くは忽ち糞焼けを起し何んだ意見も糞もあはれも争ひ少い時は二度とない女郎買ひをする位はな事は當り前だ好し

小言を云ふも云つて見ろ此方こちらも量見があると最前は少く、親父
 の巾着きんちやくからクヌチ出したもの、今は金庫より大枚な金を掘み出しどう
 何處どこの馬の骨たやら知れもしない白狐的しろきつを贖出あつだした上に逆もの事にモ一少
 し親父に當つてやらうなと、其白狐と連れて欠落ちをするなど、は往々に
 七味ある習ひなれど是れ則ち糞焼の致す所なり故に若し諸君にして遺教の
 遺焼いせうを起すあらば其害果して如何にあるべきやソレコソ大變なりと云ふべ
 し實に我々は諸君が糞焼を起さんことを畏れて預じり一言を呈するあり然
 れども諸君が退去後の舉動と看るに我々の心配の無用の心配たる有様に見
 受け申すは國家の爲めお賀すべきの一事なり流石に諸君が時世と看るの活
 眼あるに依るなるべしといへども畢竟は諸君が昨非を悟るに吝ならずして
 前途必ず温和手段を以て宿志と達するの決心とあされしが故なるべし然る
 止は最早諸君に向て忠告の必要はなげきとも往々事と誤るは主任者其人よ
 めちすして末派の人々もあるが故に真一も糞焼を起すものありては諸君が

前途の大事を誤るに至るべしと存じ敢て一言と呈すること、はなれれば
 き入れのあるるなきのは他人の事あれば道人の自由おもなれず依て其邊は
 諸君の御勝手たるべきなり

○會社流行に連れて瞞着會社を起らぬ乎

苟くも社會の公益をなすとあらば屈のやうな事でも結構なり矧してソレツ
 プカ砲千百門と揃へて一時にアドンビリくと打放す程を響きを社會に與ふ
 む利益と起すあらば此道人の鼻は此上五六尺も伸ばして赤鬚國あかひげくにを跨る事も
 出来る譯けよて結構もく大結構なりと喜ばざるを得ずと聊の前置きをし
 て爾よ本論に説き入らんとするは當今會社の流行益すく盛んにしてヤレ
 百萬圓だ二百萬圓だも云ふ大會社も牝犬めづいぬが七八疋もヒヨロリくと子を生
 ひが如く何の造作ぞうさくもなく押立おしだてるの一事でありますが此會社設立の競争は決
 して嘆すべき事にあらず仮令一人りが水産會社を立てんとすれば忽ち同
 種類の會社が三日を出でずして二つも三つも立つと云ふのナト劍呑ではあ

ありやなど心配するものもあるにもせよ我々は矢張り結構の部類に入
 れて善人の一人なり一昨年より昨年へ掛けてオアカイ大会社の新たに起り
 た事は無慮三千三百三十三正ドッコイ猿の敷ではないが随分夥しいと申し
 て可なりでありませうが此会社の皆な相應の利益を生み出して株主お池を
 吹おせるやうな事は印紙を帖つてあつたといたしませうのヤカに目的のあ
 りる會社を押立るものはなるべし其目論見書などを看ると實に驚くべき程
 の利益あるべき割合にて世人も安心して入るが出来るやうなものゝ鬼角當
 て事はモッコロ輝となり易きものにてなるゝ安心の出来なさに當惑いたす
 たり現に山王の猿の敷程ある會社あして正に實利と收るまでの好結果を得
 たるものは日本鉄道會社や馬車鉄道會社若くは空相ドッコイ滑べた相場會
 社の類値々にて其他は是れら利益と生み出そうとするホヤハヤ的なるを
 以て今より何とも評しおぬる次第なれども果して悉く皆な好結果と得べし
 運籌の量ぐこそが出来るでありませうの深く案ずて見ると此會社流行の時

實際し若しも豺狼のやうな山賊ともが毒氣を此處に乗せて大なる會社を立
 て入看るのは得策であらう思ふやうに株金が集れば我々は役員と爲て思ふ
 身分にやらうし真一損をして尤漢れとなつた處が有限責任と預じ以て遺跡を
 持ひて置たに依て株主が損をするまでの事で我々は痛くもなければ痒くも
 ないのみを講化するまではは相應な金もオメテらるゝぶらうなどゝ云ふ善
 なる考ひより柵から牡丹餅の落るやうな大儲けのあるやうに大なる法螺と
 吹きたてゝ職着せられた日に實に困る暇しあらずやマサカ斯うなる不都合
 な會社を企む横着ものもあるまじく又あつた處ダウツカリ載せらるゝもの
 もあるべしと雖も山師程法螺の吹きやうが巧みあつてなるゝ好い音が
 するものないに依て亦甚た剣呑なり先づ滅法外に利益のある勘々に仕組ん
 た會社は却て怪しいものとして揮をしめて掛る方が損をする愛ひもなく大
 丈夫ならんと入らざるお世話なれども御注意までには申すなり全株金は儲か
 らぬと云ふ方が眞當なり四ツ谷海道で馬矢を拾ふやうなコロコロと木金

が儲らつて溜るものか其馬矢をらも拾ひ手が多くて容易よは拾ひ難し況んや大金をやヒヤ〜

○道理が絲瓜平絲瓜が道理平

抑も〜道理とは如何なるものを圓くして團子の如きもの平角にして豆腐の如きもの乎將た漠然として河虎の屈の如きもの乎我れ團子を嚼れば其甘くなれば必ず鹽辛い味あるを知る我れ豆腐を舐れば其淡泊にして泡の如き味あるを知る我れ又河虎の屈と嗅けば其音は聞へざれども鼻と摘んで臭いと叫ばざると得ず獨り道理に至ては聲もなく臭もなく剛さが如く柔さが如く殆んど識別をべからずと雖ども道理ハ本來仁者と智者の共和製造に係が聞へて之と味ふれば言ふべからざるの味あつて存するらと思はる然らば則ち道理は一の人造物にして時あつては廢され時あつては在るも妨げなからべきか強へて道理と附ければ何者に道理なからん大を男兒にして肩と背のしを踏ひ笑ひ鼻を屈として人の鼻息と嗅ひ人の鼻息と捕ふは通常の

道理よりして云ひば廉恥を知らずとも云ふべく翠丸を蕪ろに巻るとも云ふべしと雖ども人の世に居るや衣食住を得ると以て第一となを余は斯ふる廉恥を忘れ翠丸と蕪ろにするやうな商賣とするは甚た腰抜けのやうなものなれども之に依て以て生計と營み是れ余が飯と食ふの道理なりと云ひば此道理も一ツの道理にして左まで可笑しくなきにあらずや又女子にして巧みあ笑ひ妙に媚び忽ちに狎れ忽ちに唾み女子の徳義を破り女子の媚行を纏まふするものは亦是れ通常の道理より云ひば甚た不埒なりと雖ども陰陽相合するの自然の道理にして何も彼是れと云はる、筋もなく又格別怪しくもないと云ひば此道理も亦一理なきにあらず此道理に不思議はあらずれば彼の妖猫と變じて頻りお柳巷に轉び白狐と化けて常に花街に狂ふものも亦却て婦人の柔順なれと云ふ美德に適ふの道理なしとも云ひ難たし此に至て再び考ふれば道理が絲瓜乎絲瓜が道理乎殆んど其判断に苦しむのでありません在實業は我れ雇人にあらず既に雇人にあらざる以上は主人公も同然なれば人

民を壓制するも妨げない云ふ道理が飛出すことないとも云ひず此道理が
 飛出すと在野黨も亦道理と故智附け人民の主人なれば官員は雇人なり我れ
 既に主人たる以上は官員と叩き倒して我權利を張るの道理があるなど、途
 方もない道理と擔き出ることなしとも云ひず若しもコンも道理もあるとし
 た時の阿娘と情郎と拵ひるの道理あれば少年に女郎と買ふの道理あり婦婦
 に媚妓と爲るの道理あれば治郎お身代と叩き潰すの道理あり活大黒は程好
 く坊主を騙すの道理あれば坊主も亦旨く後家と誑らすの道理ありと云ふも
 可ならん、斯く道理と附けて看ると何でも蚊でも道理の附くやうなものまで
 凡そ道理は人間に存すと云ふもの、宛るも絲瓜の棚に懸るが如く、フツツ
 然として其尻常に据はらざるもの、平實に道理は絲瓜は如く之を何れの處に
 附るもフツツ然たらざるはなし然れども物の道理は十人是として三人非
 とするが如くの場合に於て自から現出すべきものなれば之を是とするもの
 多しときは姑く以て道理として可ならん乎近來は悉一方の世の中とあり無

理が通つて道理が引込ひの傾きなきにあらざるに依て道理絲瓜の區別と辨
 別置るも亦必要の事なるべし(ヒヤク)

○好色の虎の巻を論じ

凡そ人間の慾は種々様々なれども其最も大よして最も深く又最も切なるも
 のは色慾に如くものはあるべし色慾の爲め二度と得られぬ貴重の性命
 まで惜氣もあつて棒に振るものあり金の欲しきも錢の懸ひしきも詰る處は費
 な色慾と遠けたきが爲めでありませう世に英雄と仰られ豪傑と稱され無上
 の權威を振ひたきも要するに亦十分色慾を遠けたきが爲めでありませう英
 雄必ず色を好むと云ふも畢竟は英雄の色と好むにはあらず色を好むが爲め
 に大奮發をやらうしユツツヤツツと英雄の位地に昇るとも云ふべき、今の
 英雄とは皆な賢明にましませども若し最愛の權妻や外妾を置くことは一
 切相ならん速に放逐せよと宛るも保安條例が壯士と追出したやうにせざ
 るを得ざるのみならず外に出てゝも妓妓や街妻は勿論何等の名義を附ける

も唯つた獨りの細君の外は如何なる美人に出食しすとも指たもさしては相
 ならん若しも犯すときハ即剋英雄の看板を奪ふて野あ追ひ下すぞとの嚴法
 を設けあバ英雄社會に如何なる感トと與ふべきや我に虎鬚さへあればソレ
 で満足いたそとして毫も不平を起そことなしとそべき乎我は保証いたす
 能はずでありませう英雄社會ぞら既に然りとせば矧して凡夫の争いるて不平
 あるべき人として色を好まぬものは玉の盃に底なきが如しとは即色是空
 を悟りたる明僧の云ひ草なるにあらずや又徳を好むもの我未た色を好むが
 如たものを見ずとは毛唐人の寐語なごごにして色慾は人類世に在るの間は皆免
 れざるの大慾なり而して色慾も亦種類多しといへども硝子びやうしと倒さぬ釣る
 した的の別嬪も惚れられ左右よりヤイノノと取り絶たがれる程嬉うれしきもあ
 り又愉快なるはないてありませう故に此道人なども生意氣しんぎも二六時中別
 嬪に惚れてく惚れ抜ぬけで居ると雖ども別嬪の方からは絶へて惚れるもの
 もあひ處の見向ひて呉れるものさへなぬが故に求めて無計の苦勞くろうもするめ

ひか話しにもなすぬ赤面の至りなり偶々途中で頗る別嬪に出遇ひ覺おぼえず何
 處を流す折まりしも別嬪も亦我あ思ひを掛けしにや行き違ひならに横目よこめ
 ヲロリと觀られた時は天窓あまのまどより冷水れいすいと注つけられたやうみツツとする程嬉うれ
 と思ひ止とどまば好いのに別嬪の跡あとも附て其行く處ところにお伴をして行くも其別嬪は
 或る路次口より裏店に入りいける噫あや々惜あはれし野のあ遺賢いせけんあり泥どろに美玉みぎよくを埋
 むとい此事なりコリヤ捨て、い置おかれぬと其裏店うらみせも遣入はなり込み近隣きんりんの人
 内うち々別嬪の素性すじやうを聞へて大々失望彼の新造しんぞうは顔かほこそ好いが惜あはれことには大
 敵目てきめで値打ぢうちがないと云はれ左すれば横目で我を視るみることも想おもひしは惚れたに
 あらずして全く敵目の故ゆゑもてあらしめと腰を抜かすまでまでに失望したとては
 滑稽談師の云ひ草でありますが眞に別嬪に惚れたらんに命いのちも惜あはれことな
 いと思ふのも亦無理ならずと云はん乎我々は近頃耳嬉みみうれれしき吉報きちほうを聞けり
 今より新造好し乎別嬪好し乎と市中を賣り去る程も別嬪の山をなし我々の
 怪面的かいめんてきも頗る別嬪を噂うわさに持つのは朝飯前あさひめまへの事であらうと信ます十分色男じふぶんしきおとこにも

つれづれで自惚れ鏡に向ひ頻りに低い鼻を高くする工夫を案じ出し置て別荘好し乎と賣り來る時と待てヌツキ滅法に好い鼻を擇り取りにしやうと思ひもは何を圖らん此望みは才が十倍の外れ易き下宿屋の散れ二階に垢染みたる故る「ケット」と被り半風子と兄弟の交るる懶惰放蕩に身を持ち崩したる窮書生の妄想にてありました其妄想は何より起つたかど云ふと是れも其口を極めて一夫一婦の論を主張し又蕪媚妓も断然廢すべしと主張し此論を建白いたさば自然別荘の遣り場所がなくなり好い實物が手に入るなり方と云ふ妄想でありました此妄想にして果して中れば結構至極なれども大失業中ちんとして置た方が儲なるべし又手人皆な色と好むと云ふものゝ勤勞して錢を拵ひ而して色慾と達すると云ふ順序を履まず懶惰生の癖として手前勝手な考ひをせれども其考ひ通りに行はれた例しは古來曾て唯の一度もなく別荘の預算は殊々十か十必ず外れるものとして寧ろ懶惰病を療治し立派なる獨立人民と爲り十分の値打と得て後ち別荘取も新造にも飽くめ

方法を講ぜば心懶惰生の妄想は皆な此類なるを以て其身を誤るもの多きも亦宜々なり依て色を好むは宜けれども色の爲めに身を誤るものに老婆心を呈せること兩り

○大照魔鏡を照らして現今の百怪群行を看よ

唯今の社會は文明社會なりと云ふを試みに照魔鏡を照らして一見すれば尤もて怪物社會に異ならず(ソウ)と云ふも誰か又不可と云はな請ふ看よ船宿樓上蘭燈暗き處に六曲屏を繞らし風々鼻を鳴らして驚枕軋轢の間に狂轉するものは我其應來寐兒の紙幣癩痢を起すなるを知る曖昧街頭揚柳睡る邊に行人の袖を引き悄々聲を潜めて鬼哭の聲を發するもの我其幾度懲らされても性も懲りもない白鬼なるを知る美髯客として英雄と高くもなれ鼻に懸けてヒスマルクの雛形と氣取るものは我其高慢鯨公なるを知る薄唇喋々色男と粗末の面に粧ふて丹次郎の身振りや真似るものは我其自惚れ治郎なるを知る前途の損益は姑く措いて徒らに商法の烟水鍊を説くものは

我れ其の身代と悪るの山師の爲め喰ひ遣ふされ易き藥の御宗の大服様なると知る後の尻の始末と省みずして頻りに藤八等の獨稽古と雪院の中で試るものは我れ其家庫と湯藥に漬ふし易き阿房息子なると知る諸談漢は酒の烟の體釋と朋友の勸で話したばありて掃帚の馬脚と露のし偽君子は金儲けの算段と圓穴の齋に濡らしたる依て道德の假面を剥がる兩眼のしも明かあるは自鏡と掛け寄宿舎に在ての手睡と貪る癖に洋籍と社車の上に翻へし出る時ぼあも勉強せ粧ふもの内生意氣學の卒業生なるとも雙脚全く健うなるは洋秋と提げ家に居ては欠伸とするにも拘らず鉛筆と耳朶は狹んで調る處も濁燥と吹くもの内屈辭代官の公事買ひなるべし婦婦の邊りに紅粉を粧ふものは問はずして二夫に見ゆるの底底あるべし知り權助偶々體鼻揮と洗ひば必す阿三と狙ふの發意あると知るべし處女の腰柳と學んで靡るんとするもの或春情と催すの反射なるべし權妻の尻握らざるものは精郎あるの微証なるべし來て滅法外の金儲けを勤るものは財主と騙穿に陥るもあ技藝と知れ往

へて不相應の贈り物と献ずるものは髻委と香餅あて釣るの倅人なりと知れ凡そ娑婆世界に出現せるもの其跡に就て其實と求めば變化自在の魘魅其者と雖とも豈に其化けの皮と看破ること能とざるの理あらんや苟くも形跡あるものは冥府の情張りの鏡と借らざるも亦能く其本性と看破るべし近來怪化風となして百怪群行の馬骨の瑤輿に乗るもの豺狼の紳士と粧ふものも類愈々出て、愈々怪しく神變鬼化往々にして世人と瞞着するものはあり故も照鏡に照らして怪物の性跡と看破し置くも亦要用たるべしと存して斯くは演べ置くなり

○屁子帯に代て書生社會よ一言す

是迄書生と云ひば體鼻揮兼勤の屁子帯と腰へグル／＼巻き附けツツと其の衣物を衣て晴れにも足駄と穿きガクヌヲ然として大道と横行するが通常の有様なりしに近來は書生の風装と一變し假令ひ粗末ならも大概は洋服と着け左もなければ博多帯にペラ／＼然たる絹の衣物を衣て餘程立派に

なりたるは全く文明の進歩したる故乎將た書生の風が文弱に流れたるの故乎
 其調査は未だ明かならざれども書生が最も貴重なる財産の中へ數ひられた
 る屈子帯は稍や廢棄せらるゝの有様にて既に屑屋の手に渡りて柳原の襦店
 あ釣るされ居るものもあるべく又は染め屋の手と借りて貸蒲團の表皮と豹
 變したるものもあるべく又は二つお切られて全くの犢鼻褌となりしものも
 あるべく又或は犢鼻褌の職任と盡くしたて切れくとなり王子の製紙場あ
 送られて洋紙と變せしものもあるべく其行衛の穿鑿は姑く措き若し夫れ屈
 子帯にして全く書生社會より棄却せらるゝに至ては屈子先生果して何等の
 感じあるべきや屈子先生は必ず潜々然と涙と流かし長くしく嘆息するであ
 りませう余が長物となりて娑婆を去るのは時代時節と諦らめあは亦已むと
 得ざるの次第なれども最も親密の交際ある書生諸君の爲め敢て嘆息せざ
 るを得ず書生が屈子帯とクルく巻きにしてツンツンなる短き襦褌
 を衣て居るのは野蠻に均しいの田舎奥山のと云はゞ云ひ余は却て其質朴

を愛するなり是れより大學者ともなり大政事家ともなり又は大事業家とも
 爲るべきものが衣服などに綺羅と飾つて嬉れしがるやうな事での卒業も覺
 束ないのみならず武骨の中あ云ふべからざる氣概の風ありし事も亦自ら
 消滅して遂には文弱に流れるであります是れ實に嘆息すべきではありま
 せんか書生の癖にキウく鳴る博多帯でもしめるなどの以の外ある量見違
 ひと云ふべし衣物は襤褸でも何んでも一切頓着なく只々學業にのみ心と注
 ぐと云ふこそ却て心あるもの、目より視るときは錦綉と纏ひ絨服と飾るも
 のよりも美風とも視るあるべし然るに屈子帯はヨ一見ツともなひなと云
 ふやうになり行きては書生の美ある氣風は最早地に落ちたりとも申すべき
 乎余は只々此一事が嘆けかとしむと云ふであらうと考ひます我々も此屈子
 先生と同一の嘆と抱くものにて仮令ひ屈子帯に断然暇と遣はすとすも
 屈子帯をしめて居つた時の氣風を此世の有らん限り存して置きたいと存
 するなり書生諸君幸いにノウく叫ばせ屈子先生は一言と犢鼻褌なりナ

○仇文句を戒めて女風の矯正を試む

我邦仇文句の夥しきこと繪草紙屋の店と填め盡す程もあれども文育と陶治するの効もなく紅粉社會の懐ろに入れども貞操を教訓するの力もなく只々色の伊呂波の師匠と爲て春雨よしつばり濡るゝ戀路を導き四つ谷で始めて遇ふた時粹たらしむと思はしめヤイノとく〜と取り纏りコンナ良縁が唐にもなぞと二七の十四の初戀ひに早く淑女と迷せて一生涯の瑣物たらしむるの大被害あり若しも男の方より不義婚行と悔るあればソリヤ聞へません傳兵衛さんと恨みの數々云ひ立て、益と深海へ迷ひ込みイッソ殺ろして下さんせと男の膝に纏り着き前後正躰ならしむ汝は實に淫風を煽動し女徳と紊亂するの害物である豈に戒めざるべけんや咄つ仇文句其いやらしい聲と止めて余が箴言と拜聴せよと云つてヤイノと存するなり(語略)

尾聲 兒替頭猶圓にして言語未だ熟せざる時は方には是れ小學は入て單語と習ふべしの時あり汝早くも已に此黄口兒を捕ひてヒキノ黄口の聲を擧げさせて圖案もなる〜に及ばぬ戀ひに寫し繪のと歌はしめて嬉奔の學早々

腦髓は賦せしめ二七の十四を待たずして頻りに唇を擧て廻はして紅粉を粧ふを業とし肩揚げも卸ろさぬに前門早く綻びさせるは其罪一なり深宮に生れ深窓を養はるゝ貴姫淑嬢は探聞贈与の事を知る自由なきを以て其教育にさへ怠りなげをば必ず淑徳を修めて貴夫人とならるべきに汝絃歌師お伊よと誘ふに深宮お入り込み朝暮色を教ひて終に春と懐いしめ爲めに閨門と紊るもの性々にして少なからず其罪二なり汝色を教るを以て業と爲すと雖も薄く所懸到よして薄情なる娼妓にさへ動もすれば浦里時次郎の二の舞ひ世やらあはしめ終に痴男痴女をして犬死の大籠棒あらしむ其罪三なり海棠の艶あるも語と解せざれば人迷はず桃李の美あるも情と吐らざれば客濁れず汝這般の別嬪に教るに最も仇ワイ文句を以てし人の魂と有頂天下に飛ばすもの其罪四なり汝體晴らしを名として瓜彈きの中に忽ち浮氣を起こさし

め婦人尊姐の貞操を破るもの皆な此鬱晴らしに由る其罪五なり校書人と謀
 かさんどすれば先づ一二の艶曲を唄ふて人の心と引き汝と媒として遂に嫁
 客を誑惑するもの其罪六なり師匠の門、晩に際すれば必ず二上り新内の最も
 仇ボイものを唄ひ嫩少年等格子戸を隔て、聴くさへも猶春情と起し直ちに
 遊廓に走るものあり又は遂に其門に入るものありて其極や身代を叩き潰し
 の大騒動を提起するもの其罪七なり紅燈緑酒夜宴酣はなる時緒々然としで
 鄭聲を送り獨り樓上の痴郎を迷はそのみならず樓下を過るものも亦聴て頭
 に女郎が買ひたくなり爲めに若干金と擲たしひるもの其罪八なり横町新道
 怪獸の住む處鼻下長的と捕ひて珍々鴨鍋を貪り一絃は高く一絃は低く徹に
 心意氣を唄ふて人の心を籠絡し其妻子として留守宅お泣いて暮らさしむる
 もの其罪九なり汝都都を問はせ老少を擇ばず常に春情を勤めて意馬心猿を
 狂はしめ汝の爲め、一身を誤り一家を傾け或は紛擾を起し或は高麗を腹す
 等の其文句の數よりも夥し、今や天下を擧て殆んと汝の爲めに化され其害

豈に止た淫風と導くのみならんや其罪十なり汝既お十罪を犯す保安條條に
 依て退去を命すべしと戒めなば仇文句忽ち言を設けて云ふでありませうあ
 否な妾が人を迷ひすにはあらで人が妾を迷はすのである妾が假令ひ人を迷
 はさんどしても唄ふ者がなければ迷はすことも出来ないのでありませう妾を
 戒るよりも先づ唄ふ者を禁せられ、無用の辨は喋々するも益なしと云これ
 と看ると余も少々困つたあれどもな、屈せず叱ッ此畜生糞を食へど、
 首して此仇文句の廢否如何は姑く聽衆の意見に任せ置くべし

○女郎買ひの糠味噌と何ぞ

世の諺に女郎買ひの糠味噌と云ひるは如何なる意味と含蓄をるや試みに之
 を分析すれば左の通りなるを知るべし女郎買ひを好きなもの、癖として其
 惜氣もなく金錢を游廓に蒔き散らさにも似ず家も歸れば嗅の口も乾させ餓
 鬼の腹も飢やし飯の菜、糠味噌漬にて十分あり汁も啜るには及ばん況して
 鬻の骨たりとも舐るなど、奢りとしてなるべきや人間は儉約が肝要なりと

家の生汁を詰めてく、詰めらる、だけは詰めて餘した金は皆な女郎買の入
 費とせり芥子辛らさる節儉法を女郎買ひの練味噌と申すなり是も於て噂左
 衛門の不平を起すも亦尤な譯けにして家の暮らして詰めて女郎買ひの金と
 餘すと云ふは宿六に於ては都合好あるべきも此噂左衛門に於ては甚だ不勝
 手なりと自然愚痴も云ふべく小言も焼くべく遂には桶盆桶木と撥き出をの
 大立廻りもナツ始るべく實に一家親睦すべからざるの道理なり此道人も噂左
 衛門の味方と爲て宿六を槍込めてやうたいと存するなり併しながら此女郎
 買ひの練味噌的ハ獨り放蕩治郎のみに限らず世間には之に類する事が幾ら
 亦あるものと想はれます君子然たる顔色として人に道徳を説くものが却て夫
 子自ららコツツ川と馳行をやらうして居り人の狡猾を嘴々罵るものが竊
 るに驚くべき狡猾をして居り又は人に向て衛生く、と喧るまじく云ふもの
 が甚だ不養生をして自ら虎列的などを製造するの類は皆な是れ女郎買ひ
 の練味噌なるべし而して女郎買ひの練味噌の最も恐るべきものは不埒な事

家が現はれた時でありませう何となれば人民には不心得であるの不届で
 あるのとヒシ／＼取て押へ附けなから夫子自らら瞑々の中に法律を破り其
 甚しきは人民の膏血に飽くも猶未だ満足せずして國を賣らんとしたる不埒
 な政事家が毛唐國などにはあつた例しもあらればあり女郎買ひの練味噌と
 云ひば何の譯けもあき喰ひのやうなれども能く／＼味いて見ると何事にも
 流用し得べく又女郎買ひの練味噌に陥り易きを以て諸君は假令ひ女郎買ひ
 して愉快と盡くすとも家内として練味噌の感トあらしむる勿れ(ヒヤ／＼)

東京府平民

明治廿一年三月十四日印刷
明治廿一年三月十六日出版
版權所有

定價拾五錢

發行者

東京府平民
杉本七百丸

著作者

東京府士族
清水亮三

印刷人

本所區若宮町
松本秋齋

東京本鄉區湯島
一丁目十三番地

大賣捌所

東京日本橋區橫山町

辻岡文助

京橋南箱町

正文堂

全 石町二丁目

上田屋

神田淡路町

神戶

全 通リ四丁目

春陽堂

各國書林

巖谷堂

全 橋町

鶴聲社

大阪本町

岡島真七

全 新大阪町

小林喜右衛門

信州長野

西澤喜太郎

全 通油町

水野慶次郎

全 松本

水琴堂

全 馬喰町

山口藤兵衛

全 飯田

升屋忠介

全 通鹽町

高崎修介

羽前山形

五十嵐太右衛門

全 若松町

柳原友吉

全 鶴ヶ岡

地主文藏

全 通リ二丁目

山城屋

全 谷地

田宮五郎

全 通リ四丁目

金櫻堂

尾州名古屋

川瀬代助

全 通鹽丁目

大倉

肥後熊本

長崎次郎

薩州鹿兒島

吉田幸平

越後水原

西林六平

薩前船臺

高橋藤七

全 長岡

目黒十郎

薩島

鑑左右太

全 新津

中村政治

筑前博多

林斧介

全 三條

樋口小左衛門

全 本庄

山崎登

全 新瀉

林富吉

上州高崎

換平堂

全 全

櫻井三作

全 鹿島

柳風社

全 新發田

高橋長吉

武州川越

明文堂

全 高田

寶直三郎

全 全

岸田屋

羽前米澤

素月晨平

全 上尾

林廣助

甲府柳町四

柳正堂

全 浦和

中村朝次郎

全 柳町二

柳正堂支店

全 熊ヶ谷

杉浦平左衛門

全

五明堂正八

全 本庄

森田芳次郎

札幌

石塚吉郎

石川縣金澤

越中富山

越後長岡

野州宇都宮池上町

馬場町

全

全杉原町

全

全 鉄砲町

全

栃木高町

横濱伊勢崎町

全

近入書房

中田書房

上田屋

手塚祐次郎

佐藤静雄

田野邊忠平

田中正太郎

文古堂

横山六三

石塚喜一郎

宮川庸三郎

里見貞太郎

吉川伊兵衛

横須賀

全

全 旭町

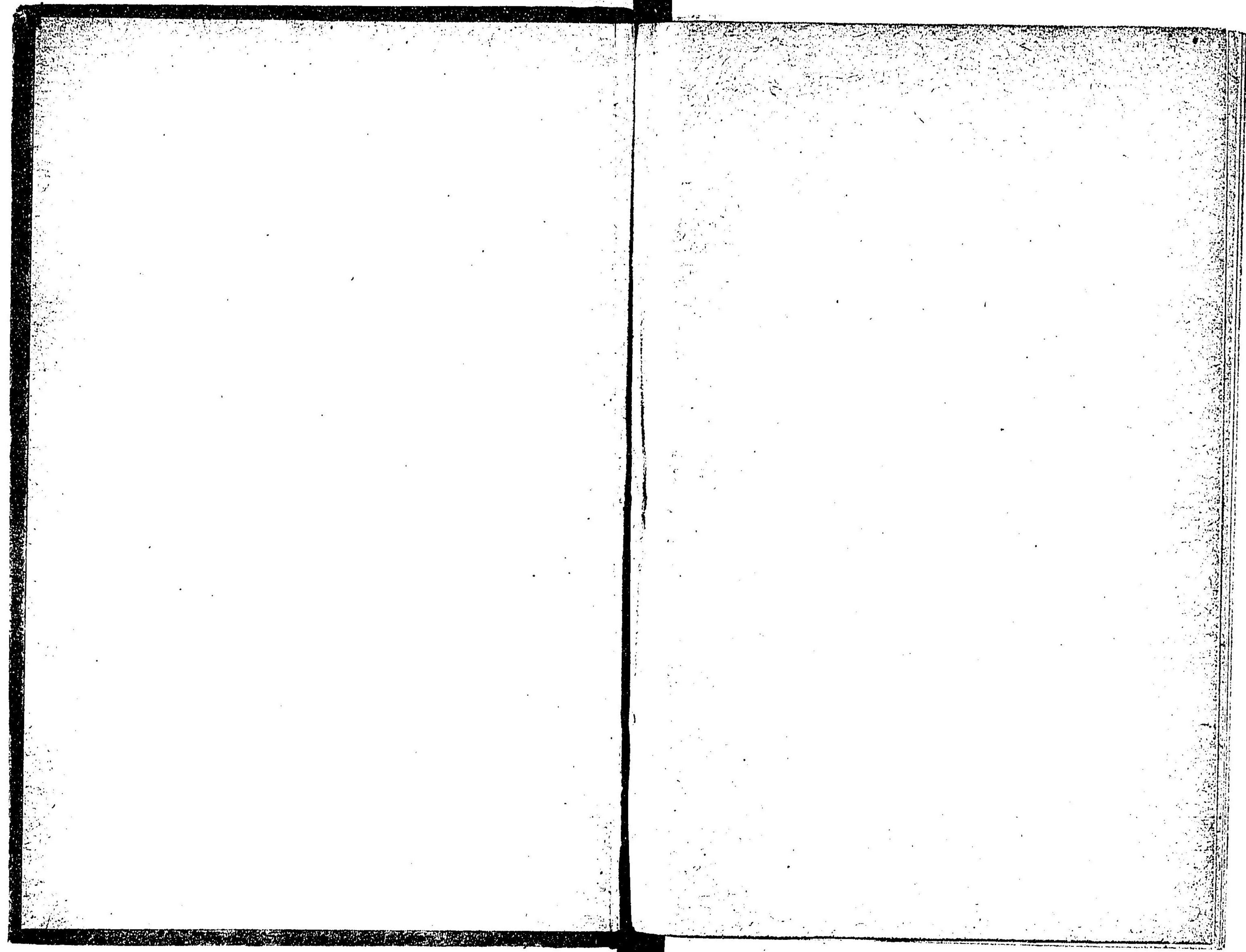
肥後熊本

金田金次郎

立川書房

開進堂

中山四馬



0
3